
半身 ~ Please don't leave me ~

fil.

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

半身 〈 Please don't leave me 〉

【Nコード】

N7382P

【作者名】

fil .

【あらすじ】

私達がただの幼馴染という関係を捨てたのは、小6の夏だった。その時は、互いにこの関係が続くと信じて疑わなかった。

あんな事さえないければ、私達はずっと一緒にいられたのに……
「忘れたくない。」 「俺だって忘れて欲しくない。」

ちよっぴりシリアス(?)な、悲恋モノです。 初めての作品
なので、幼稚な表現等多いと思います。 性描写があります。
苦手な方は回れ右してくださいw

1話（前書き）

わあ・・・！！

とうとう投稿してしまいました！！

私にとっては青天の霹靂です・・・

性描写あります。苦手な方はご遠慮くださいorz

初めての作品なので、拙い表現等と思います。

感想、批評、なんでもいいです！書き込みお願いします。。。

1話

1．終わりの始まり

涙が止まらない．．．．．

雨が降っているから、彼には見えないだろう。
そう思って、拭いはしなかった。

そもそも、見えるはずもない。

彼は、遼は、もういないのだから．．．．．

私も彼も小6だったあの頃．．

幼馴染のわたし達はすべてを共有していた。

全てを共有していたのだ。

「なあ、セックスって知ってるか？」

問われたのは夏休み、私が親のいない日に彼を家に呼んだ日だった。

何も知らなかった私は、素直に「知らない」と答えた。
当たり前のことだった。

そして彼はそれを知っていたに違いなかった・・・

「何のことだか知りたい？」

彼は重ねて聞いてきた。

年は12、好奇心旺盛な時期だった。

誰だって、こう言っただろう。

「うん、知りたい!」と。

私も例にもれなかった。

「じゃあ、教えてあげる。」

不敵な笑みを浮かべて、彼は言った。

「でもね、これ、人には絶対言っちゃいけないことなんだって。言っちゃうと、一緒にいられなくなっちゃうんだって。

ヒロ、秘密守れる?」

「うん! 私が口堅いこと知ってるじゃん。」

「まあね。念のためだよ。」

俺だってヒロと一緒にいらなくなったら困るし。」

彼は朗らかに笑った。

「私も、遼といられなくなったらヤダ!

つまんないもん。」

「だよな。」

ところでさあ、お前、生理ってもう始まってんの?」

突然の質問に私は一瞬固まった。

「はあ！？何聞いてんの！？」

遼のエッチ！スケベ！ど変態！！！」

勢いで怒鳴ってしまったけど、彼の表情が真剣だったから毒気をぬかれてしまった。

しかたなく答えた。

「始まってないよ・・・」

途端、彼はホッとした顔をした。

私には訳がわからなかった。

そうして彼は

「暑いから。」

と言って、服を脱ぎだした。

上半身が、露わになった。

幼い頃から見慣れた光景だったから、何の違和感も持たなかった。
なにせ、遼とは3才のときからずっと一緒なのだ。

風呂に一緒に入ったことだって、何度もある。

だが、さすがに最近は互いに意識し始めるようになったため、裸を見るのは久しぶりだった。

彼の体は、小6にしては筋肉質で、でも肌理細かい綺麗な肌をしていた。

彼は器量も抜群で、女子の憧れの的だった。

「ね、目えつぶつてて。

そんで、俺が何しても抵抗するなよ?」

「う、うん・・・?」

私は、素直に目を瞑った。

・・・・・・！！?

「え・・・?」

な、何してんの?」

私は、服を脱がされかけていた。

「セックスの意味、知りたいんだろ？」

「うん・・・？」

でもなんで、服なんて脱ぐ必要・・・！？」
言い終える前に、私は唇をふさがれた。

いつの間にか、私も彼も裸になっていた。

いつまでもキスをやめてくれない彼を、私は渾身の力をこめて押し返した・・・はずだったが、なぜか力が入らず、そのまま私は遠に抱かれていた。

彼のキスは上手かった。
だんだん体が火照ってきた。

気持ちいい・・・・・・

[illegible]

藤野 紘

好きな物事：苺、運動全般、遼を眺めること
嫌いな物事：酢昆布、陰口をたたく人

戸島 しま
遼 りょう

好きな物事：辛いもの、サッカー、水泳、紬
嫌いな物事：アボガド、フェアでない事

2話（前書き）

性描写あります。苦手な方はご遠慮くださいorz
初めての作品なので、拙い表現等あると思います。
感想、批評、なんでもいいです！書き込みお願いします。。。

2話

はあっ・・・・・・・・

息継ぎの時間が惜しい。

夢中で貪りあった。

「はあ・・・気持ちいい？」

彼が聞いてくる。

「うん、うん！」

私は初めての感覚を味わうのに必死だった。

彼は、私の唇から離れると、頬、首筋へとキスを落としていった。

体が、感電したようにビクッと動く。

私は、そんな自分の体の反応に驚いていた。

でも、嫌ではなかった。

これがセックスというものなのか……。
気持ちいい／＼／＼／

こんな気持ちいいことならば、毎日だってしたい。

こんなことを考えていた。

彼の手が、私の体中を動きまわる。

その度に声が漏れてしまつて、とても恥ずかしい。。。

口を押さえようとすると、彼にやんわりと手を止められた。

「抑えなくていいよ・・・
聞きたいから・・・」

「やだ・・・恥ずかしい・・・」

「大丈夫。

もつと恥ずかしいこと、今からするんだよ?」

・・・・・・・・え？

何を言ってるんだろう？

これで終わりじゃないの？

まさか、続きがある・・・？

「ねえ、セックスって今してることじゃないの？？」

「うん、違うよ。」

「今のは前戯。ふふっ。」

前戯という言葉の意味も知らなかったが、
そんな言葉を悪びれもせず言い、
いつそ妖艶に笑う彼を見て、一瞬背筋が寒くなった。

でも、逃げられないし、逃げたくもない・・・

この先に何が待っているのか、覗いてみたかった。

彼の手は次第に下半身へと移動していった。

それにつれて、体の反応が過敏になる。

初めての刺激は、あまりにも鮮烈で。

まだ序の口だということがわかっていても、体はこれ以上ないって
いつくらい反応する。

そんな私を、彼は愛おしそうに見つめながら、愛撫を続けていた・
・
・

3 話（前書き）

なんか、意図に反して長くなりそうな予感が・・・

いつまで続けられるか、自分でも心配です。
とにかく、頑張ります！

3話

彼の手が、私の脚を割る。

「え？・・・え？」

私は訳がわからないまま、彼の愛撫を大人しく受けていた。

なぜ抵抗しなかったのか、後から考えると不思議だ。
そう言えば彼も、あの時よく抵抗しなかったなあ・・・と言っていた。

多分、遼だったから、というのと・・・
やっぱり気持ちよかったからだと思う。

はあああつつ．．．！

突然、彼が指を中に入れてきた。

な．．に．．？

ああ．．．．っんあ！

「ヒ口、濡れてる．．．．．」

なんのことだかさっぱりわからないまま、私は喘がされていた。

彼が指を動かす度、体が芯から熱を帯びて疼く．．．

いつの間にか指が2本に増えていたけれど、痛みより快感が強くて。

う．．．ふあ．．

ああ〜．．．!!

「ね、気持ちいい．．．?」

返事もできなくて、ただ喘ぎながらコクコクとつなずく。

「俺も気持ちよくなっていい?」

うなずく。

当たり前だ。なんで私だけ気持ちよくなって、
遠が我慢しなければ
いけないのだ。

すると、突然、彼は中に挿れていた指を抜いてしまった。

あああ!!.....んう
なん.....で.....

体の中心が、失ったものを求めてヒクヒクと痙攣する。

どう.....し.....て.....

動けないまま、必死で頭をめぐらしていた。

だが間もなく、何かすごく熱いものが入り口に押し当てられた。

その時、なぜか私は安心したのだ。

「痛いからね……。ちよつと我慢して……。
力抜いて……。ね？」

彼の言うままに、自然と力が抜けた。

直後、すごい圧力が体の内部にかかった。

は・・・ああ・・・つつ!!

「じめ・・・もうちよっ・・・と我慢・・・」

そのまま、力づくで最奥まで貫かれた。

あああああゝゝゝ！！！！

声にならない音が喉から迸る（ほとばしる）。

「ごめ……ん……痛い……？」

すっぽりと入ったまま、彼は私を気遣う。

顔が近づいてきて、目尻をなめられる。

そのまま私にキスすると、口の中にしょっぱい味が広がった。

気づかぬ内に泣いていたらしい。

彼はとても優しくて………頷きながらしがみつくと、そのまま少しの間抱きしめてくれていた。

「大丈夫？」

頷くと、彼はゆっくりと体を動かし始めた。

ふうう………っあ……いやあ……！

少し動くだけで、体が悲鳴をあげる………と同時に、なんとも
いえない快感が体を襲う。

ああ………っ………あっ

んん………うう………っ！！

彼も苦しそうに、でも顔を上気させて私を突き上げる。

んくっ・・・ううっ

突如、あるところを突かれた途端、桁違いの刺激が私を襲った。

はあああああああ・・・っっ!!!!?!

はあっ・・・あっ・・・ああ・・・ん・・・っ

「ここか・・・」

納得したように言う遼。

そのまま、同じところを何度も攻めてくる。

ああああっ・・・はあっ・・・もう・・・!!

ひいやあああ・・・っっ!

狂ったように叫び続ける。

限界だった。

体がミシミシいつて、でも中は燃えていて・・・

気がおかしくなりそうだった。

りよ、遼・・・・・・・・！！

も・・・う！ やめ・・・・・・・・・・て・・・・・・・・！！

も・・・無理・・・・・・・・っ

「大．．丈夫だから。
もう．．．イカせてあ．．げる．．．」

私が初めて「イツた」のはその直後だった。

急に動きが激しくなり、一際激しく突かれた瞬間、視界が真っ白になった。

あ・ ・ ・ ・ ・ ああああああ ああああああ ! ! ! ! ! ! ! ! !

くうっ・・・っ

同時に、彼も切羽詰まった様子で呻いた。

体内に、何かが溢れた。

それは、なぜか私の心を温かく満たして・・・私は思わず彼をギョウツと抱きしめた。

私たちは、繋がったまま何分か抱き合っていた。

ピ~~~~ンポ~~~~ン！

突然インターホンが鳴った。

「！---どうしよう！？」

「え・・・ヒロの母さんじゃないかな？」

「う・・・うん。お母さん、鍵持ってるし・・・」

「じゃあ、出なくていいよ。」

どうせ宅配便か何かだろ。」

「そ、そうだね・・・大丈夫だよね・・・」

「まあ、一先ず服着るか。

このままって訳にもいかねえし。」

「うん・・・」

言えなかったが、私はもう少し遼の体を見ていたかった。

それを感じ取ったかのように、彼は笑った。

「これから、いくらでも見してやるよ！

ははっ

ヒ口はわかりやすいなあ。

俺、ヒ口のそゝいうところが好き。」

「・・・・・・・・／／／／／」

服を着ながら彼はこう言った。

「・・・・・・・・これで、ヒロは俺のもんな？」

「え・・・・・・・・俺のもんって・・・」

「嫌かよ？」

「いや、そういうことじゃなくて・・・・・・・・
また、今日みたいなこと・・・するの？」

「ヒロ、もしかしてお前、嫌・・・だったか・・・・・・・・？」

「そついつ訳じゃ・・・・・・・・ないけど・・・・・・・・」

「けど？」

「恥ずかしいし、痛．．いし．．．」

「．．．．．恥ずかしいのは俺だっ
て一緒だよ。
痛いのは．．慣れるらしいぜ？
大丈夫だよ．．．」

「そっかなあ．．．」

服を着た後で、私達はもう一度しっかりと抱き合った。

「なあ・・・次はいつ二人になれるかなあ・・・？」

「う〜〜ん・・・カレンダー持ってくる。
待ってて。」

「
おっ」

こうして、小6の夏、私達の誰にも言えない関係は始まった・・・

3話（後書き）

ここまで来るのがすごく長かった気がします・・・
疲れましたぁ。

長編の小説書いてる方って本当にすごいですね！！
見習いたいです

・・・ということで、小6時代はこれで終わりです。
次は中学編です。
少しずつ、登場人物を増やしたい&身長体重の設定を変えていき
たいです！！

あつ、感想、批評、何でもお願いしますm（ ）（ ）m

4話（前書き）

二人は中学生になります。

話の展開早くてすみません！！

ネタが・・・なんか尽きそうです。早い・・・

4話

「おい！紘！遅れるぞ」

窓の外から聞きなれた声が聞こえる・・・

「紘！起きて！

遼君待つてる！っていうか、あんた学校遅れちゃうわよ！？」

「もう ちよつと・・・」

「あんた・・・何言つて・・・

・・・いいのかなあ？ 皆勤逃すよあ？」

その一言で私の目が覚める。

「お母さんっ！！今何時！？」

「うんとね。7時50分。」

[illegible]

やばい！

これはやばい！！

本気で遅刻する！

何を隠そう、この藤野紘、遅刻したことは一度も無い。

だが、今日はどう考えてもヤバイ。

今7：50。

始業は8：10。

家から学校まで自転車飛ばして15分。

「『ご飯食べてる時間無いじゃん』><」

「おにぎり作ったから、学校着いたら食べなさい!」

「ありがと〜〜おか〜さん!」

ここまで寝過ごしたのは初めてだった。

こうなったのも昨日・・・

「あんなこと無ければ今頃・・・っ!!」

「どうしたの？」

「あ・・・いや・・・なんでもないよ。
・・・じゃっ行って来る!!」

「気を付けてね」

挨拶もそこそこに家を出ると、遼がしびれをきらしていた。

「おせーよ」

「誰のせいで寝過ごしたと・・・!!」

「俺は起きられたも〜ん」

うそぶく遼に、束の間殺意を覚える。

昨夜

ブブーブブーブー・・・

バイブ音が聞こえると、紘はすぐさま携帯を開いた。

一通のメール。

「もうお袋さんたち寝た？」

「うん」

短く返信すると、まもなくベランダに遼が現れた。

「・・・何・・・待ってたの・・・」

呆れてため息をつくと、遼は楽しそうに笑った。

「だって久しぶりじゃん」

私と遼の家は隣同士。壁と壁の隙間もほとんど無い。

まあ、都会なんだから当たり前っちゃ当たり前。

しかも部屋も隣り合っているから、ベランダのある私の部屋に来るのは遼にとっては簡単なことだった。

ちなみに、彼は運動神経もいい。

本当にうらやましいやつだ。

部屋に入ると開口一番

「ヤろ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・他に何か言うことないの・・・」

「なんかある？」

本当に腹が立つ。

「嫌じゃないくせに・・・」

そう言って距離をつめると、深い口づけを落とす。

う！・・・んっ

何気に、私はこういう強引さが好きだったりした。

次第に息が上がっていく。

う・・・ん・・・はあっ

ん・・・んう

遼の手が、私の服を脱がす。

遼の手は大きくて、温かくて・・・もう、脱がされている時の手の
感触だけで感じるようになってしまっていた。

そのまま体を委ねていると、遼が突然手を止めた。

「今日は、紘 自分で脱いで」

「え．．．？」

「エロそう．．．．見たいなあ．．」

「や、やだよ！何でそんなことしなきゃいけないの！？」

「じゃあ、これで止めちゃってもいい？」

紘、もう感じてんでしょ．．．」

「ひど．．．．わかってて．．．」

「いいじゃん。 続き、して欲しいんでしょ？」

脱いで．．．」

ものすごい恥ずかしさを感じながら、それでも遼の言っなりになった。

火照った体を鎮められるのは、遠しかなかった……

その様子を見て、遼は満足げに唇をなめた。

彼は自分も服を脱ぐと、私に覆いかぶさってきた。

……ふっ……

くちゅ……はぁ……んっ……ん……ふぁっ

キスしながらの愛撫に、体が卑猥な音を立てて反応し始める。

「やっぱり……たまつてたねえ……
最近やってなかったもんな……」

「うっ……さいつ……はぁっ！」

指が深々と入れられる。

そのまま中を探るように、色々な方向に動かされる。

ううん・・・あんっ・・・

ああ・・・はっ・・・ふうあ・・・

ああっ・・・っ！

その場所を探し当てると、遼はニヤツと笑みを浮かべた。

執拗にそこばかり攻めてくる。

ああああ．．．！！

いやあ！．．．はうつ．．．んんう．．つ！

「嫌．．．じゃないだろ？」

言いながら、更に中を擦る力を加える。

あああゝゝゝ．．．．．あ！

はああっ！ ああ！

「も．．．う．．．．．っ！」

絶^{すが}るような気持ちで遠を見つめる。

「じゃあ、きちんと言わないと・・・」

彼は焦らす。

「・・・い、イカせ・・・て・・・!!」

すると突然、彼が私の脚を持ち上げ――

間に頭^{かしら}を埋めていった・・・!!

舌で敏感な部分^{なぐさ}を舐^なるように転がされ、私の体は耐えられなかった。
・
・

はあああっ！

ううん．．．んっ．．．．．ああっ！！

ふえ．．．りよ、遼．．．んんんっっ

え．．．．あ、あ．．．はあああああっ！！！！

二度目の絶頂は早かった。

遼もほぼ同時に果てた

結局、昨日は4回もシてしまった．．．．．

睡眠時間はたったの3時間……

に至る

そして今

バタバタバタ……

ガラッ!!!

キーンコーンカーンコーン……

「はあ・・・はあ・・・ギリセーフ・・・!」

「おお、良かったなあ間に合って」

「あんたのせいだかね!」

ホームルーム
HR後

「紘～～!おはよう!!」

ギリギリだったじゃん!どうしたの?」

声をかけてきたのは前の席の 小関おせき 有希ゆうき。

小学校からの親友だ。

あ、もちろん遼との関係は知らない。

「ああゝゝ・・・ちよつと寝坊・・・」

「ええゝ、珍しくない？どしたのよ？」

「まあね・・・ちよつと・・・遅くまで起きててさ。」

「さては深ドラでも見てたなあゝ？
だめだよゝゝゝ、早く寝なくちゃ・・・」

「う・・・ん、今日は早く寝る！」

遼に聞こえるように、少し大きめに声を出す。

聞こえたのか、遼が振り返る。

次の瞬間彼が口パクで伝えてきたのは、とんでもない内容だった。

「も・ち・ろ・ん・きよ・う・も」

多分、こう言った・・・

- - - - -
- - - - -

< 中学1年 >

小関^{おぜき} 有希^{ゆうき} f e m a l e

身長：154cm 体重：42kg

好きなもの：しよっぱいもの、編み物、料理

嫌いなもの：甘いもの、ゲーム（↑機械音痴だから）

紘^{おとこ}・・・身長：152cm 体重：39kg

遼^{りょう}・・・身長：163cm 体重：51kg

4 話（後書き）

結構長く書いたつもりです。

なあなあな文章になってしまったらすみません！

感想お願いします！！

5 話（前書き）

こんにちは！

こんなグダグダな文章ですが、続きをどうぞ！

5話

ん．．．んあつ

はあ．．．．．は．．．あああ！！

二人同時に果てると、そのまま抱き合って息を整える。

再び下半身に伸びかけた遼の手を、ペシッと叩く。

心なしに恨みのこもった目で見つめられるが、もちろん無視。

「えゝ、いいじゃん。

もう一回だけ……」

「絶対ダメ！ 昨日もそう言ってたじゃない！
今日はもう終わり！！ 遼も早く家に帰って。」

「ヤダ……どうせ今からじゃ眠れねもん。」

「眠れる！ っていうか、寝るの！
昨日ほとんど寝てないんだから。 体壊すよ？」

「紘ひろとヤツてて具合悪くなるんなら本望……」

「……
とにかく今日はダメ！ 早く帰って！」

「ちえ……冷たいの。」

そう言つと、遼は渋々ながら帰っていった。

残された私は……眠れなかった。

遼は、私を何だと思っているのだろう。

ただのセフレ・・・？

だとしたら、こんな関係はやめにした方がいい。

でも、そうなった時、私自身彼を諦められるだろうか。

怖い 怖い 怖い 怖い 怖い 怖い 怖い 怖い 怖い 怖い
・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・

5 話（後書き）

すいません・・・もうどうしても眠いんで、今日はここまでにさせていただきます。

短くてすみません。。。

6話（前書き）

すみません！！

今回もやたら短いです><

6話

まさか、私は遼のセフレなんかじゃないよね・・・？

こんなことを考えることになった理由は、その日の放課後にあった。
・・・

遼はモテる。

そんなことは知っていたが、いざ彼が告白される段になると、とても不安になった。

まさか、OKしたりしないよね・・・

クラスのかawaii（私なんかよりずっとかawaii）女子に、放課後体育館の前に来るよう頼まれたことを知った私は、いけない思いながらも隠れて話を聞いてしまった。

「戸島君・・・好きです！」

お付き合いしてもらえませんか？」

「・・・え・・・いや・・・」

「だめですか？」

「いや、ダメっていうか・・・そんなこと言われるなんて思っても
みなかったし・・・」

そう。

遼は、自分がいかにモテているか知らない。

女子達もそのことを知っているから、より憧れるのだ。

「お願いします・・・っ」

彼女は必死だ。

なんせ、クラスの大半の女子が、彼女が今日遼に告白することを知

っている。

断られでもしたら、明日からクラスの笑い者だ。

しかし――

「いや・・・ごめん、無理だわ、そういうの。」

「・・・っ・・・誰か好きな人でもいるの？」

「・・・・・・」

「そうなんだ・・・」

あ・・・もしかして、紘ちゃん？」

「え・・・・・・」

この時、私はちょっと期待していた。

遼が肯定してくれることを・・・

「ああ・・・やっぱり。」

二人、仲いいもんね。

ねえ、もしかして・・・付き合ってたりするの?」

「は・・・はあっ!?

違ちがいよ!! そんなわけないだろ!

何言ってんだよ、お前!」

・・・・・・!!!!

「そう・・・そっか・・・

ごめんね、こんなこと言っちゃって・・・」

「別に・・・気になるようなことでもねーし。

話、これだけ?

俺、もう行っても大丈夫?」

「うん・・・ごめんね。」

「いや・・・こっちこそ・・・

付き合えなくてごめん。」

「ううん。いいの。」

あ、でも、これからも友達としてはお話していい・・・?」

「あ、ああ。もちろん。
じゃあな。」

うわぁ・・・遼、キツイなぁ・・・

でも・・・・・・

遼・・・私との関係・・・否定した・・・

なんで？

好きだから私とHしてたんじゃないの？

まさか、体だけの関係とかいって割り切ってる・・・！？

そんな・・・

私は、悶々としながら家に帰り……。でも、夜はまた遼に抱かれた。

さすがに、今日はいつもより気分が乗らなかった。

遼もそれを感じていたらしく、最中も心配してくれた。

大丈夫、と言うと、安心したようにいつもの遼に戻った。

本当に、私は

・・・そんなのいやだ！！！！

明日、はつきりさせよう。

このまま一人で悩んでたって仕方ないんだから。

こつ自分に言い聞かせて、私は漸^{おそ}く眠^みりについた。

6 話（後書き）

あけまして おめでとぅございます!!!!

この文句は前書きに書くべきだったような気がしますが・・・まあ
ご勘弁をw

いつになるかはわかりませんが、遼視点でも書いてみたいなあと思
っている今日この頃です。

それでは・・・今年もよろしく願いします!!

7 話（前書き）

こんにちは。

日が開いてしまいました・・・

これからは、少し落ち着いた感じで書いていこうと思っています。
少なくとも今は・・・

7話

「おい、紘ひろ！
まだかあ？」

「待ってー、もう行く！！」

バタバタと音を立てながら玄関に急ぐ。

「いつてきまあす！」

「いつてらっしゃい。気をつけてね。」

「はあーい」

「ごめんごめん」

「まったく・・・紘は赤ん坊だよ。
呼ばないと出て来ねえ。」

「失礼しちゃう！

それに、赤ちゃんは呼ばれても気分次第では出てきませんっ」

「そうかあ？俺が呼ぶとどんな赤ん坊でも擦り寄ってくるぞ？」

「・・・・・・・・・・」

それはあんたがおかしいの。」

こんな痴話げんかをしながら、私は、どうやって話を切り出すか必死に考えていた。

私の様子に気づいたのか、遼^{リョウ}が声をかけてくる。

「どうかしたか？」

「ん・・・ちよつとね・・・。」

「昨日も変だったじゃん。」

何かあるなら言っちゃまえよ。楽になるぞぉ」

「・・・・・・・・・・あのさ・・・」

「うん？」

「遼って、私のことどう思ってる？」

「は？ どう思ってるって？」

どーゆー事？」

「だからさぁ・・・友達としてとか、何とかあるじゃん。」

「うっ・・・ん

紘の事かぁ。 あんま考えたことないね。」

頭にきた。

「だから、考えてって言うてんの!!」

「はぁ？ 何怒ってんだよ・・・」

「じゃあ聞くけどさ、何考えて私とHしてんの!？」

Hって好きな人としかないもんだよね。

遼は、ホントに何考えてんの？ わかんないよ・・・」

「・・・お前、そんなこと考えてたの？」

「そんなことじゃないよ！」

私にとってはねえ・・・女子にとっては大切なことなのに!!」

あゝあ・・・ヒス起こしちゃった・・・

「わかった、わかったよ・・・」

泣きそうな気配を察したように遼が宿^{なだ}める。

「紘のことねえ・・・

空気みたいなの？ いて当たり前っつーか？」

「私のこと、好きなわけじゃないの・・・？」

「好きかって言われれば、そりゃ好きだよ。」

「そうじゃなくて！」

恋人とか、そっちの好きじゃないの・・・？」

「恋人？」

そんな事言われてもさ・・・考えたこと無いんだって・・・」

本当に困ったように言う彼を見て、私の決心がついた。

「・・・そう。

・・・ねえ、これから、朝迎えに来なくていいよ。先に学校行つてて。

それと・・・当分遼とは寝ない。」

「・・・え？」

なんで？ 意味わかんないんだけど。」

「わかんなくていいよ。もしかしたら、男子にはわかんないのかも
しれないし。」

遼の顔が怒りに歪んだのがわかった。

「はぁ？ ホントにわけわかんねー・・・」

．．．．．もう勝手にしろよ！」

そう言うと、彼は自転車を飛ばして行ってしまった。

私は追わなかった．．．．

もうダメかなあ．．

そう思い始めた。

7話（後書き）

感想お願いします！

8話（前書き）

日によって長さが全然違って、すみません!!

m
こんな文章ですが、読んでいただけるとありがたいですm
――

8話

学校に着くと、有希が心配そうな顔をして私を待っていた。

「ねえ、戸島君と何かあったの？
いつも一緒に来てんのに。」

「ああ・・・うん。ちょっと喧嘩^{けんか}。」

苦笑いしながらもサラツと言うと、有希^{ゆつき}はふう〜ん、と納得しているのかわからないような返事をした。

遼の方を向いても、彼はこっちを向かない。

完全に無視だ・・・

「・・・ねえ、紘^{ひろ}ちゃんはさ、戸島君のことが好きなの？」

「え、ええ!？」

思わず声が上ずってしまった。

「な、なんで？」

どうしたの、いきなり・・・」

「いや、だってさ、いつも戸島君と一緒にいて普通って感じじゃない。」

今日、一緒にいなくて落ち込んでるし。

ちよっと離れたからってそんなに落ち込むのって、好きだからじゃないの？」

「・・・そんなわけないじゃん！！ありえないよ。」

遼なんて人の気持ちも考えないヤツだよ？ 誰があんなやつ・・・

「

「そう・・・？私はいいい人だと思うけど・・・。」

・・・はい？

何を言ってる・・・？

「紘ちゃん、戸島君のこと何とも思っていないんだよね？」

真剣な表情に気圧けおされて、思わず頷うなづいてしまう。

「私、戸島君のこと、好きかもしれない・・・」

「・・・っ！」

・・・そうなんだ・・・遼もユキに好かれるなんて果報者かほうものだ
なあ・・・はは・・・」

抗議の言葉を何とか抑え込む。

今の私に、抗議する権利は無い。

ましてや、遼のことを拒絶した今日では・・・

「じゃあ、告白するの・・・?」

声が震えそうになるのを堪えて、やっとのことです。

「しよっかな・・・」

戸島君、受けてくれるかなあ・・・」

痛い・・・胸が痛い・・・

呼吸が苦しい・・・なんで・・・

喉が、ヒュー・・・と嫌な音を立てる。

呼吸ができない・・・

視界が暗くなる

「紘ちゃん・・・！？　どうしたの！？　ねえ！」

呼ぶ声が聞こえる・・・でも、この声じゃない・・・

呼んで・・・お願い・・・私の名前を・・・

「・・・君!？」

「・・・おい!! 紘!？ 紘! しっかりしろ!」

ああ・・・やっと・・・

この瞬間、私は意識を手放した

・・・紘！・・・紘ちゃん！・・・藤野さん！・・・おい、紘！
こらっ！静かにしなさい！・・・

うるさい・・・と思って思わず目を開けると、皆が顔を覗き込んでいた。

「ああ・・・良かった！！どうなっちゃうかと思った・・・！」

有希が安心したように笑う。

「藤野さん、具合はどう？」

先生が尋ねてくる。

「おい、紘！ ホントにどうしたんだよ？」

遼まで心配そうだ。

ああ．．．．．私、倒れたのか。

たかがこんな事で．．．親友が自分の好きな人を好きだって知っただけで．．．．．

馬鹿みたい。 本当に馬鹿みたいだ。

そう思うと、笑いがこみ上げてきた。

「ふふ．．．．あははははっ．．．」

皆驚いている。

そりゃそうだ。 狂ったとも思われているだろうか。

もう何とでも思ってよ……

そう思い、笑い続けた。

「・・・あなた達、教室に戻ってなさい。・・・早く！早く戻りなさい！」

普段は温厚な先生が、声を荒げて命令する。

皆は私と先生の様子に驚いて、そそくさと保健室を出て行った。

一瞬、遼と目が合った。 哀れんでいるような目だった…………

「藤野さん。どうしたの？」

遼の目を見て笑いが止まった私に、先生が優しく尋ねる。

答えられるわけも無い。

俯^{うつむ}いて押し黙っていると、先生が頭を撫^なでだした。

「言いたくないならそれでもいいよ。
でも、本当につらくなったら、他人^{ひと}を頼らないと。ね？
先生は何でも聞いてあげるから。
そのためにいるんだから。」

コクンと頷^{うなづ}くと、先生は笑った。

「もう戻る？もうちょっと休む？」

「もうちょっと・・・休みたいです・・・」

「そっか。気持ち悪いとかはない？
何か欲しいものある？」

「大丈夫です・・・え・・・と、小関さんをお呼びできただいて
もいいですか・・・？」

「うん・・・？いいわよ。」

喧嘩、とかじゃないよね？」

「はい・・・ぜんぜん違います。」

「そう。ならいいわ。」

後5分で授業終わるから、そしたら呼んでくるね。

他の子達はいれないほうがいいのよね？」

遼の顔が浮かんだが、すぐさま打ち消した。

「はい．．．お願いします。」

「じゃあ、先生一回職員室に戻るね。」

「はい。ありがとうございました．．．」

先生が出て行った後、私はユキに何と言おうか考えた。

少なくとも一つ、言うことは決まっている。

遼のことは、諦めてほしい

8話（後書き）

紘は以外と体が弱かった・・・！！

次は遼サイドで書いてみます。

どういう書き方になるかわかりませんが、がんばってみます♪

そういえば、やたらと・・・が多いですorz
読みにくかったら本当にすみません！

9 話（前書き）

遼視点で書いてみました。

うまく書けてはいませんが、何とか読んでくださーい！！

9 話

―朝から人を苛立たせるヤツだ……

―うぜえ……

遼^{りょう}が紘^{こう}に対してこんな感情を抱いたのは初めてだった。

―大体、何が言いたいんだよ？

俺がなんか悪い事でも言っただか！？

あゝ、ホントム力つく……

そう思いながら自転車を飛ばしていたら、いつの間にか学校に着いてしまった。

いつも^{ひろ}紘と一緒に来ているから、一人だと皆が^{めづ}珍^{しい}がる。

「おい、遼、藤野はあ？ 風邪か？」
「なあ。めっづらしいの」

「うっせーな。喧嘩^{けんか}だよ、喧嘩。」

「へ」。

お前らでも喧嘩なんてするんだな。」

「するよ！ 悪いかよ・・・？」

こう言いながら、「そう言えば紘と喧嘩なんてしたことあったか？」
と考えてしまう。

― 喧嘩なんてしたこと、ねーや・・・

ずっと一緒だったもんなあ

ホント、空気みたいなもんじゃん。

アイツ、ホントに何怒ってたんだろ……

紘が来ても、見向きもしなかった。

こっちを向いているのに気づいたが、それも無視した。

—このくらいしてやったっていいだろ

俺だって怒ってたんだ……

そう思って友達との会話に入っていたら、突然、緊迫した声が聞こえてきた。

「紘ちゃん！？ どうしたの！？ ねえ！」

— 紘………!?

何があつた!?

皆の視線の先には、倒れた紘がいた。

「………おい、どけっ!」

「えっ? 戸島君!」

「おい! 紘!! 紘! しっかりしろ!」

皆が啞然としているのも気にせず、紘を抱き起こして名前を呼び続けた。

そんな様子を、有希が少し寂しそうに見ていることに気づく由もなかった。

担任の先生が来て、紘を保健室に運ぶために抱え上げる。

女教師なのに力があって、こういう時とても頼りになる。

皆して先生の後について行こうとした時、1限目のチャイムが鳴った。

ガラスと戸が開いて、担当の教師が入ってくる。

様子を見るや否や驚いた彼の声は、掠^{かす}れていた。

「あ……あ……のう……誰か……倒れたん……ですか……」

「ええ。このままだと生徒たちも落ち着かないと思うので、少しこの子の側につかせてやっていてもいいですか？
目が覚めたら、皆教室に戻しますから。」

「ああ……はい。どうぞ……」

廊下で、何人かが笑い出した。

「あいつ、ウケるう〜〜！」

「あんなに怖がりだなんてな〜w」

いつもだったら一緒に笑い飛ばすところだったが、この時はそうはいかなかった。

―絃が倒れたって言うのに・・・！！
なんでヘラヘラ笑ってられるんだよ！？

「うるせーよ！！
少しくらい静かにできねーのかよ！？」

「な・・・なんだよ・・・」

腹が立ってしょうがない。

なんで朝からこんな目に遭^あうんだ！？

保健室のベッドに寝かされた絃は、時々うなされたように苦しげな顔をした。

その度に気が気でなくて思わず声をかけてしまうと、皆俺に合わせるかの様に声をかけ始めた。

うう・・・ん

首をフルフルとさせる紘に、声をかける。

「紘！・・・・・・・・おい！紘！起きろよ・・・」

「こらっ、静かにしなさい！」

と、紘が目を開けた。

皆がホッとしたように声をかける。

「おい、紘！・・・ホントにどうしたんだよ？」

俺も堪^{たま}らず声をかける。

紘はじいっと俺を見つめていた・・・・・・・・と思ったら、突然視線を

外し、笑い出した。^{はず}

俺たちのことなんか視野に入っていないかのように笑い続ける。

―はあっ！？

なんだコイツ。どうかしちゃったんじゃないか？

呆然としながら紘を見てみると、先生が教室に戻るように言ってきた。

もう少しここにいたかったが、先生のいつになく語調の強い命令には逆らえなかった。

保健室を出る時、紘と一瞬目が合った。

俺を見た紘は、その瞬間、怯^{おび}えたような目をした。

「……？俺、なんかしたっけ？」

紘が怖がるようなこと……したか？

答えが出ないまま教室に戻り、残りの授業を受けた。

授業を受けている間も上の空で、その事ばかり考えていた。

「まあ、いつか。」

授業終わったら、紘のところに行こう……

授業が終わって保健室に行こうとした遼の足を縫いとめたのは、担任の声だった。

「小関^{おぜき}さん、ちょっといいかしら……？」

あ、皆、藤野さんは少し疲れてるようだから、今は保健室にはい

かないこと。

いいわね？」

はあゝい、と皆の返事が聞こえる。

―はあ？ 冗談じゃねーよ。

別に俺一人行ったって、何の問題もないだろ。

そう思って保健室に向かうと、そこに向かっているのが遼一人ではないことに気が付いた。

―・・・なんで小関が・・・？

9 話（後書き）

何か、次の話の展開が丸わかりですね・・・

まあ、そこは目をつぶってください♪

それでは、また次回！頑張ってくださいww

10話（前書き）

こんばんは。

落ち着け～落ち着け～、と自分に言い聞かせながら書いてます・・・

あんまり激しいのも微妙なんで、こんな話を書いて緩衝材かんしょうざいにしよう
としてますが。

こんな文章ですが、今回もよろしく願いますm（ ）（ ）m

10話

ガラっという音と共に有希ゆきが現れた。

「ねえ、紘ちゃんは・・・戸島君が紘ちゃんの事好きって知ってたんでしょ・・・？」

はい・・・？

突然の無茶振むちやぶりに驚いてしまい、頭がパンクしかける。

「どうしたの？ 何言ってるの？
遼は、私のことなんて好きじゃないよ？」

有希は默然^{もくぜん}と首を振る。

「ううん・・・戸島君は紘ちゃんが好きだよ・・・
紘ちゃんが倒れたとき、すごく慌ててた・・・。」

その時、有希は、少し哀しげな顔をしていた。

「そ、そうなの!？」

「うん。」

「いや、でも・・・。」

「でも、何？」

「・・・何か思い当たることでもあるの?」

「いや・・・。」

そんなわけないよ・・・

だって今朝、遼は私に、好きかなんて考えたこと無いってはっきり言ってたし・・・

「どうしたの？黙っちゃって。」

「いや、とにかく、遼が私のこと好きなんてありえないんだよ・・・

私は・・・好きなんだけどね・・・。

ごめんね、ユキ。私嘘ついた。」

有希は、フツツと笑うと言ったのけた。

「うん。知ってた。」

私こそ意地悪したの。ごめん。

あ、戸島君のこと好きって言うのはホント。でも、紘ちゃんが本当に戸島君のことが好きなんだってわかったら、諦めようと思ってた。まあ、私はその程度だし・・・

紘ちゃんは戸島君いないとおかしくなちゃうでしょ。ふふふつでも、まさか倒れちゃうとは思わなかったよ、さすがに・・・

心配したんだからね？」

「ありがとう・・・でも・・・ひどいっ！..」

「紘ちゃんだって。人のこと言えないでしょ。
私だって真剣だったんだから・・・」

そっかぁ・・・でも、遼のことが好きって・・・いつから??

頭に浮かんだ疑問をそのまま口にすると、有希はあっさり答えてくれた。

「もちろん、最初から。」

えええ・・・っ！！

「だって・・・最初って・・・」

「うん。小1の時から。だって、戸島君がっこいいじゃない。まあ一目ぼれってヤツだね。」

でもさ・・・その時から、お互いしか見えてないのが良くわかったから・・・

ず～～つと我慢してた。

紘ちゃんも私の最初の友達だったし。取り合って決裂^{けつれつ}なんて馬鹿らしいでしょ？」

「

・・・ごめん・・・」

「なんで謝るの？」

「何にも知らなかった。」

「知ってたら、私たち今まで続いてないでしょ。」

「う……………」

「…………はい、これでこの話は終わりっ！！
紘ちゃん、他に話すことあった？」

「ううん…………私も遼の事話そうと思って……………」

「そうだったの？
じゃあ、私が言い出さなかったら…………？」

「うん。遼のことは諦めてほしいって言おうと思ってた。」

「…………ふ…………ん。」

ねえ、もし私が諦めないって言ったら、どうするつもりだったの？
「？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・
考えてなかった・・・・」

「ふっ・・・あはははは・・・
そのくらい考えときなよ。相手が私で良かったけど、もっと強
引な人だったら負けてるよ？」

「う~~~~~~~~・・」

「まあいいや。じゃあ、私、教室に戻るよ？
紘ちゃんも、もう来る？」

「う~~~~ん・・・もうちょっと休む。サボれるときにサボってか
なくちゃ！」

「・・・ねえ・・・そういえばさ、なんでユキは私の事ずっとチ
ヤン付けで呼んでんの？」

「ああ・・・なんでだろ？癖くせ？小1からずっとこうだから
なあ。」

「もしかして、呼びつけの方がいい・・・？」

「だって・・・他の人は呼びすてなのに、昔からの友達がチャン付けておかしくない？」

前から言おうとは思ってたんだけど・・・」

「あはっ。確かに。」

じゃあ、^{ひろ}紘、ね・・・なんか変な感じ。ふふっ」

「ね。」

ありがとう、ユキ・・・」

「どういたしまして・・・紘。
じゃあね。」

フワッと笑うと、大切な親友は保健室を出て行った。

私は、^{わだかま}蟠りが無くなり、さっぱりした気持ちでベッドに寝転がった。

一方

保健室を後にした有希は、戸の前でいつもより紅潮した顔で硬直している遼を見つけた。

「・・・あ・・・戸島君・・・
もしかして・・・聞いてた・・・？」

遼は、何も考えられないまま只頷いた。

「そう・・・紘と話すのなら、中に入ったら？」

何事も無かったかのように言うと、有希はその場を去った。

— 紘と戸島君、どうなるかな？

・・・もしあれでもダメだったら、アタックしてみよっかなあ。

戸島君、聞いてたんなら私の気持ちもわかってるだろうし・・・

有希はちよっぴり腹黒かった・・・

10話（後書き）

前話からもう話が見え見えの文でしたが、いかかでしたでしょうか？

感想等もお待ちしています！

それでは。

11話（前書き）

こんばんは。

今までの二人の関係って何だったんだろう？って思っていました。
た。

何も考えずに書いてたバチが当たった気分ですww

11話

再度ガラツと戸が開いたかと思うと、そこにはいつもより顔の赤い
遼が立っていた。

「・・・・・・・・・・？ 遼？ どうしたの？」

「えつと・・・・・・・・ごめん。
おせき小関と絃が話してんの、聞いちゃった・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・なあに～～～～！？

じゃあ、じゃあ、私が遠のこと好きって言ったのも、有希もそんなのも、ぜんぶんぶ聞いちゃったの・・・！！？

パニック状態だったのに、口から出たのは意外と冷静な言葉だった。

「で、それ聞いてどう思った？」

「どう思ったって・・・よくわかんねーよ・・・」

やっぱりそれか・・・そうだね。

有希には悪いけど、やっぱり私、もうダメそうだわ・・・

と諦めかけたその時。

「……でも、小関が言ってたけど、^{ひろ}紘が倒れた時、俺ホントにおかしくなるかと思った。

今までこんなこと無かったし……目え覚まさなかったらって思ったらゾツとした……。

これが好きってことなら、そうなんだと思う。 ホントに考えたことなかったからよくわかんないけど……。」

え……？

これって……もしかして。もしかしたりする！？

いささか早口で告げられたその内容に、私は内心^{おんしん}躍り上がった。

「……ね……じゃあさ……私達、両思いつてこと……？」

「う……そうなんのか？」

まあ、そういうことになんのかな？」

互いに混乱しながら確認すると、笑いがこみ上げてきた。

遼も、つられてなのか笑っている。

幸せだった。

やっと気持ちが繋がった———そう思うと、晴れ
晴れとした気分になった。

「ねえ……改めて言うけど……。私、遼が好きだよ。」

「うん。さっき知った。」

「……だから……私と付き合ってください!!」

「はあ。うん。わかった。」

「……ねえ、なんか他に言い方ないの……?」

「んなこと言ってたって・・・」

「はあ・・・ふふつ。　ふふふ・・・」

二人で笑い続けた。

さっき倒れたとは思えない程、気分が良かった。

「そろそろ教室戻るか？」

「・・・うん。　遼、先に行つててよ。
一緒に行ったら何か言われそう。」

「なんで？いつも一緒なんだから皆何も言わねえよ。
変なヤツ。　それに・・・俺達、付き合つんだろ？」

「ん・・・わかった・・・　じゃあ行こうか。」

「
おつ」

教室に入ると、皆心配してくれた。

遼と帰ってきたことなんて気にもされていなかった。

その夜、遼は昨夜のように部屋に来た。

私は笑ってガラス戸を開けた。

寝た時間はたったの30分だった。

でも、遅刻はしなかった。

幸せ過ぎて目覚ましが鳴ると頭がパアツと晴れた。

登校中も、遼と一緒に通かよえていると思うだけで幸せだった。

そうして付き合い始めて6年

私達は高校3年生になった。

11話（後書き）

やっと二人が完全にくっつきました。

これから、かなり時間が飛びます。。。すみません。
完全手抜きですね・・・ハア・・・

では、今回も感想お願いします！！

12話（前書き）

えっと・・・今の時点で、どんな話にしようか考えてませんく

書きながら考えていきます・・・

文がおかしかったりしたら申し訳ないです。

12話

12月。

私も遼もセンター試験に向けて最後の詰めに入った。

自慢ではないが、私達は成績が良い。

某国立大学の医学部を目指している。

先生達も、「お前達なら大丈夫だろう」とすっかり大船に乗っている。

その期待を裏切るつもりは無い。

だから、今は好きなことも我慢・・・・・・・・・・していない。

もちろん、遊びに行ったりはしないし、好きなfacebook
やアメブロも覗^{のぞ}かないようにしている。

だが……遼との関係はほとんど毎日更新している。

毎晩のように遼は私の部屋の窓を叩く。

私も、そのノックを拒むことは無い。

私の親も遼の親も、毎晩の情事には気づいていないようだ。

両親にそれとなく話を振ってみたが、きょとんとしていたから間違いないだろう。

ありがたいことだ。

さすがに、この時期にバレたらただではすまない。

私達の逢瀬^{おしほ}は慎重に行われていた。

時が流れるのは早い。

12月31日、^{おおみそか}大晦日。

私は眠らなかった。

ずっと抱かれて、満たされ続けた。

ベランダの窓から初日の出を横目に見ながら、私はその夜何度目かの絶頂を迎えた。

最近模試が立て込んでいて短い時間しか抱き合えなかったためか、
遼も激しく求めてきた。

遼が喜んでくれている……そう感じられることが、私にとっての幸せだった。

そして、私達はその行為によって、受験勉強で疲れた精神を癒^いした。

遼がいたから、私は勉強でも何でも頑張れた。

年が明け学校が始まると、皆ピリピリしていた。

当然のことなのだが、私には他人事のように思えて仕方なかった。

遼さえいれば、私は何だってこなしてみせる。

この自信が、私を無敵にしていた。

恋愛は人を強くしてくれる………実感したのはこの時
だった。

だが………同時に恋は人を脆くもする………

神様は非情だった。

いや．．．．最悪の事態は免れたまぬがのだから、文句は言っではいけないのかもしれないが．．．．．

8日の夕方、家の電話が鳴り響いた。

音がやけに大きく聞こえた。

電話を取った母は、絶句して立ち竦すくんでいた．．．．．

「遼が．．遼がつ！！
轢ひかれて．．．．

・
・
つ
・
・
・
・
・
・
・
「

数分後、母に電話の内容を聞いた私は・・・目の前が真っ暗になっ
た・・・

12話（後書き）

更新が随分と遅くなりました。

すみません＞＜

今年高3になり、忙しくなるので更新が遅くなるかもしれません。

というか、もしかしたら、1年ほどまったく更新できないかもしれません！！！！

あああああああ・・・

忙しくなる前に、なんとか書き上げてしまいたいです！

13話（前書き）

こんにちは。

お久しぶり??です。

更新が遅くなつてしまいました。。。

こんな作品ですが、読んでいただけたら幸せです。

13話

「遼がつ！・・・遼が！
轢かれて・・・っ！！」

受話器から漏れる声はほとんど聞こえないほど小さかったが、切迫した様子だけは強張った母の表情から読み取れた。

「ええ・・・ええ・・・」

「・・・病院ですね・・・すぐに向かいます。」

そう言って電話を切った母は、どっと疲れたような顔をしていた。

「・・・お母さん・・・？」

「ああ・・・紘。落ち着いて聞いてね・・・
遼君が・・・車に轢かれたの。・・・・・・」

え・・・・？ 遼が・・・轢かれた？？

「ねえっ・・・遼、生きてるよね！？
生きてるよねっ！？」

「・・・・・・今、治療中だって・・・・」

いや・・・死なないで・・・・・・死んじ
やダメ・・・

死んじゃイヤ・・・・・・・・・・お願い！！

頭がガンガンと打ちつけられるように痛い。

でも、意識は飛ばなかった。

とにかく早く遼のところへ――

私の頭はそれで一杯だった。

ボオツとした頭のまま母の運転する車に乗り、遼のことをひたすら
思い続けながら、病院に着くのを今か今かと待った。

「・・・・・・・・・雅美ちゃんっ！！ 紘ちゃん！！」

病院に着くと、泣きじゃくりながら遼のお母さんが駆けてきた。

「遼君は！？ 手術はどうなったの？
大体、なんで車になんて轢かれたの！？
・・・・・・・・」

矢継ぎ早に質問されて、遼ママは狼狽えた。

「・・・・・・・・手術は、終わったわ・・・・・・・・まだ目を覚ますまではわからないってお医者様は言ってたけど・・・・・・・・」

現場にいた人が言うには、飛び出した女の子を助けようとして・・・って・・・」

私はその時、遼を馬鹿だと思った。

人を助けて自分が怪我^{けが}するなんて・・・

遼は、1週間眠り続けた。

もうだめか、と医師達があきらめかけたその日に、遼は死の淵^{ふち}から舞い戻ってきた。

大切なものを置いてきて……………

遼が目を覚ました時、私は学校で最後の授業を受けていた。

学校になど来る気分ではなかったが、母に無理やり送り出された。

私は、遼が目を覚ますまでずっと傍^{そば}にいたかったのに。

学校が午前で終わり、携帯を開くと母から1通のメールが。

「遼君が目を覚ましたよ。来てもいいけど……………」

┐

その歯切れの悪さに、私は苛立ち^{いらだ}を覚えた。

遼が目を覚ましたんだったら、もっと喜んだって……

そう思った。

自転車を飛ばして病院へ急いだ。

病室の戸を勢いよく開けると、遼と遼ママ、それに母がいた。

「紘^{ひろ}……」

困ったような目で私を見る母の様子に、言葉にできない不安が押し寄せてきた。

遼を見た。

遼もこちらを見ている。

見ているのだが………無機質な目。

私を、まるで見知らぬ人間を見るような目で見ていた。

「・・・・・・・・・・遼・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・なあ。母さん。

遼って誰だよ。・・・・・・・・さっきからずっと言ってるけど・・・・・・・・
それに・・・・・・・・この人誰・・・・・・・・？」

間違いなく私を指差して、最愛の恋人は言っただけだ。

「・・・・・・・・え・・・・・・・・・・・・・・・・？」

思考が停止する・・・

血がスUTTと引いていくのが自分でもわかった。

私は今度こそ気を失った

13話（後書き）

下書きなしで書いたので、文脈がおかしくなっている所があるかもしれません。

その場合は、遠慮なく書き込みをお願いします！！

感想も是非！！！！

14話

目を覚ますと、母が心配そうに私を見下ろしていた。

「…………気分はどう？紘。」

気分？

そんなの良くないに決まっている。

でも…………具合が悪そうなのは母も一緒に…………

これ以上母のことを追い詰めなくなかった私は、精一杯のウソをついた。

「もう、大丈夫……………」

「そう…………」

遼君はまた寝たわ…………後でまた顔を見てきたら？」

「・・・・・・・・だって・・・・・・・・遼は私のことわからない・・・・・・・・っ」

「・・・うん・・・・・・・・お医者さんがね、事故で頭を打った時の後遺症だろう、って。

遼君ね・・・・・・・・今、自分が”やすひろ”って名前だと思ってるんだわ。

何処からそんな名前出てきたんだろうね・・・・・・・・その名前以外、何もわからないんだって。

・・・・・・・・瑞貴みずきのことわからなかったんだって。

説明してやっと自分の母親だって納得したみたい・・・・・・・・

・・・・・・・・遼君、これからどうなっちゃうんだろう・・・・・・・・

・・・・・・・・

そんなの、私が一番聞きたい。

私を忘れるなんて・・・・・・・・

小さい頃からずっと一緒だったのに・・・っ

全部消えちゃったの・・・？

私はどうすればいいの・・・・・・

遼を失ったら、私は・・・

気持ちが少し落ち着いたところで、私は遼の様子を見に病室に向かった。

すうすうと気持ちよさそうに眠っている遼は、一週間前と同じ顔で中身だけどこかに行ってしまったのかと思うと、やるせない気持ちになった。

「遼・・・起きてよ・・・
本当に私のこと、忘れちゃったの・・・？」

遼がいなかったら、私はどうやって生きてけばいい・・・？

遼・・・お願い・・・・・・・・・・・・・」

しばらく遼の顔を見つめていると、彼が急に目を開いた。

「・・・どうしたんですか・・・・・・・・・・？」

自分に対して敬語を使う遼に、私は胸が刺されたように痛むのを感じた。

「いえ・・・・・・・・何でもないです。ごめんなさい。
・・・・・・・・体は大丈夫ですか？」

無意識に、私も遼に対して敬語を使っていた。

「ああ。ありがとうございます。大丈夫です。
そちらこそ、さっき倒れましたけど……」

「気にしないでください。ふふっ……大丈夫です……」

「そういえば……俺、自分の名前しか覚えてないんですよ……
もしかして、あなた、俺の親戚だったりしますか？」

……遼……

「……あ……いや。いきなりこんな事言つてすみません。
母とも結構親しげに話してましたし……何回も見に来てくれますし。」

私はあなたの恋人だ、と言ってしまいたかった。 言いたかった

が、そこで彼を混乱させるわけにはいかなかった。

私は理性でなんとか感情を押し殺した。

「ええ。 まあ、遠縁のようなものです。

. ”ヤスヒロ”さん、私達実は同い年なんですよ。

だから、敬語っていうのもちよっと . . .

タメでいきましょうよ。」

「そうだったんですか。 じゃあ、タメで . . . ははっ

ふうっ

あ。名前聞いてなかったね。
なんていう名前なの？」

「……ヒロ、です。藤野 紘。呼び捨てで、紘って呼んで。そういえば、ヤスヒロ君の名前って、どういう字書くんだったけ……？ 忘れちゃった。」

「えつと。
てんかたいへい
天下泰平の泰に、糸偏に力タ力ナのナとム書いて紃。
画数多くてやなんだよなあ。」

「・・・力ぶっちゃうけど、俺のこともヒ口って呼んでよ。
 なんか、ヤスって呼ばれたくないんだよね。　ヤスヒ口ってフル
 で呼ぶには長いし。」

[illegible]

「……私の字と同じ……」

「え・・・？」

もしかして、ヒロの字と俺の字、一緒なの？

・・・すげえ！！

すげえ偶然だなっ

はははっ・・・」

・・・偶然なんかじゃない・・・

だって・・・その名前は遼が勝手に作り出した名だもの・・・

・・・

「じゃあ、俺達名前が一緒なのな。一部だけだ。

なんか変な感じだけど、まあお互いヒロって呼び合ったっていいよな。

あ・・・もちろん、紘が嫌ならいいけどさ。」

嫌な気はしなかった。

「ううん。

いいよ。じゃ、お互い、ヒロで。

ふふっ……ホントになんか変な感じ……あははっ」

そんなこんなで、私ともう一人のヒロとの関係が始まったのだった

<人物紹介>

藤野 雅美^{まごみ}

48歳

好きなもの：家族、料理、掃除
嫌いなもの：散らかった部屋

瑞貴とは大学のサークルで知り合った。（弓道部）
面倒見が良い。

戸島 瑞貴 みずき

46歳 好きなもの：家族、漫画、編み物

嫌いなもの：pc、携帯（↑全く使えない）

雅美にはとにかく甘える。

14話（後書き）

ここまで書いたはいいいのですが・・・これから先の展望がまったく見えてません。。

作者だろう！！とお怒りの皆さん、ご最中です。

でも、大目に見てください！><

15話（前書き）

家で色々と嫌なことがあってクサっている今日この頃です。。。

15話

遼——もとい泰紘が退院してまもなく、センター試験の日が遂にきた。

直前に色々な事がありすぎたため、私の両親も泰紘の両親も私達にあまり多くを期待はしなかった。

だが

泰紘はともかく、私は絶対に合格圏内に入ると決心していた。

心はボロボロだったにもかかわらずだ。

泰紘の目が覚めてから、私は憑かれたように勉強に没頭した。

”遼”がいなくなってしまったことを忘れたかったし、何より、一刻も早く医師になり、泰紘を診^みてあげたかったのだ。

”泰紘”として暮らし始めた彼を、紘は認められなかった。

必ず”遼”を取り戻す

私はその思いを支えに、正気を保っていた。

泰紘も、何故か勉強の記憶はあるらしく、センター試験でも中々（なかなか）の点数を叩き出した。

結果

私・・・836/900点、泰紘・・・820/900点

当然、二次試験の足切りにはひっかからない。

泰紘は「俺ってアタマいいのなww」と自分で自分を褒めていた。

が……私の頭には、「遼だったら、840点は取れた……」
という、泰紘が聞いたら悲しみそうな考えしか無かった。

私達は二次試験に向けて猛勉強し始めた。

二人とも、親からは「私立に行くお金は無いし、留年もできないからね」と言い含められてきた。

泰紘も頭の奥底深くで覚えていたのだろう、私立を受験したいとは言わなかった。

学校も事実上終わり、自宅と塾を行き来しての勉強生活が始まった。

泰紘とは、経過観察の意味も含めて毎日会った。

、 遼、 の記憶を取り戻すことを願いながら……

しかし、一向に記憶は戻らなかった。

一方泰紘は………事故後何かと世話をしてくれる紘に、
いつしか心が惹かれていった………

だが、紘がその目に映しているのは自分でも、視て（・・）いるのは自分でないことに気づいていた。

しかし、誰を自分に重ねているのか、泰紘にはまったく見当がつか
なかった。

当然のことなのだが……

互いに様々な思いを抱え、1か月が経った。

二次試験まで後1週間。

紘は、泰紘のことを認められないながらも、自分の心に何とか折り合いをつけて彼と接した。

泰紘も、最初の頃より紘が優しいのを感じ取り、なんとなくしにホッとしていた。

二人の間で交わされる会話は本当に他愛のないもので。

それでも、二人は満足していた。

二人の関係を心配していたのは、本人達よりも親の方、特に母親だ

った。

事故以前、自分たちの子供が互いに好きあっていることは気づいていたし、二人ともそれを好ましく思っていた。

子供たちが毎夜何をしていたかは知らなかったにしても……

彼女達は二人の今の関係がどれほど脆い^{もろ}ものか、痛いほど理解していた。

紘の、遼^{りょう}を取り戻したい気持ちも、泰紘の記憶がないことの焦りも、よくわかっていた。

だから、二人が今願う事は一つ。

——変化はゆっくりでいいから………心を壊さないで。

16話（前書き）

眠い・・・眠いです。

最近授業でも寝てしまって、先生の視線がとっても痛いです><

16話

それぞれの思惑を抱き、紘と泰紘は二次試験の日を迎えた。

二人の共通の不安は・・・試験に面接が含まれていることだった。泰紘は何を聞かれても困らないように準備をしてきたつもりだったが、どうしても不安を拭いきれなかった。

朝

「いつてきまゝす!」

「はい。頑張つてねー!」

「もちろん! じゃあね!」

緊張と期待の混じった気持ちで家を出た紘を、泰紘は門の前で待っていた。

「おはよう・・・」

なんとなく元氣のない泰紘の声に、紘は驚いた。

「・・・どうしたの？　もしかして、眠れなかった！？」

「いや・・・そうじゃなくて。

試験、面接もあるじゃん・・・そりゃ練習も何回もやったけど、やっぱり心配でさ。」

「あゝ・・・まあ、確かにね。

でも、ヒロだったら大丈夫だよ！　私が保証する！」

「紘のお墨付きかぁ・・・ありがたいけどね。
ははっ・・・俺、もしかして上がり症かな？」

「上がり症？　ヒロが？」

「・・・あはははははっ・・・ないない。　ありえない。
大丈夫、ヒロはそんなに弱くないよ。」

でもどうしても上がっちゃうんだったら、緊張を解く方法、教えてあげる。」

「え？ 教えて!!」

「3秒息吸って、2秒止めて、15秒で吐ききるの。それを最低3セット。」

そうすると、頭に落ち着け～っていう脳波が出るんだって。」

「へえ～」。

紘ってホントスゲーよな。何でも知ってんの。」

「そんな・・・そんなことないよ。」

あ、それとね、その呼吸法やってる時間が無い時はね……………

拳を作って、2～3秒思いっきり握りしめるの。そしたら、今

度は思いっきり脱力。それを大体2～4回。

なんか、一回筋肉を無理やり緊張させると、その反動で、力を抜いたときの度合いが大きくなって、緊張が解れるんだって。」

「・・・やっぱり、紘はすごいわ。」

紘がいれば何でもわかるなあ～」

ニコニコと屈託のない笑みを浮かべて自分に語りかける泰紘を、紘

は複雑な気持ちで見ている。

「………」 泰紘、に心を動かされるようになってきたのだった………

しかし、遠くのことを忘れられるはずもなく、紘の心は葛藤で吹き荒れていた。

試験会場に着き、別々の教室に向かう。

紘は、泰紘に声をかけなかった。

声なんてかけられなくても、泰紘は自分を紘が応援してくれているのを肌で感じ取っていた。

だから、泰紘も一言「後でな」としか言わなかった。

互いに頷きあうと、後はもう振り返らなかった。

試験は、思ったより難しかった。

解けない、とヒヤヒヤした問題がいくつもあり、終わった時には紘は疲労困憊だった。

何とか面接ではポーカーフェイスを装ったが……

一方泰紘は、確かに難しいとは思ったが不思議と落ち着いて解くことができた。

面接もあまり緊張せずに受け答えでき、とてもホッとしていた。

泰紘は、教室から出てきた紘の顔を見ると驚いた。

紘がこんなに疲れ切った表情を見せるのは初めてだった。

声をかけるのも躊躇ためらわれるような表情だった。

「おい、紘……大丈夫か？」

「……………あ……うん。」

思ったより難しくて……………疲れちゃった。」

「確かに。まあ、もう終わったんだからさ。

飯食って帰ろうぜ。……………もう6時になるよ。」

自分は全部解けたとは言えない泰紘は、紘を慰めなぐさながら、ほとんど無理矢理にファミレスへと引っ張り込んだ。

紘は、まだ放心状態だった。

「おい、紘……………?」

「……………うん……………?」

「ホントに大丈夫か？」

「う・ん。

疲れただけ・・・大丈夫」

そんな風に^{こた}応えながら、紘は「受かってなかったらどうしよう」と不安に思っていた。

それを読み取ったかのように、泰紘が、

「大丈夫だよ。 紘なら受かる。 自信持てよ。・・・な？」

と言っのを聞いた途端、紘は泣き崩れた。

「あ・・・だつて・・・ヒクッ

大問3の(2)も、4の(2)も間違えちゃったあ・・・
全然わかんなくつて・・・ヒッ 最後の最後で・・・わかつ・
たのに！

書いてる時間・・・なくつて。

きつと落ち・・・たよ・・・どうしよう・・・ヒクッ」

「大丈夫だよ・・・数学だけだろ？」

紘は、悲観しすぎるんだよ・・・そんなこと言ったら、皆落ちちまうよ。」

中々泣き止まない紘の背中を、泰紘はポンポンと叩いてあやし続けた。

そして内心、不謹慎にも、泰紘はそんな紘を「可愛い!!」と思っていた。

「ホント……？　グスッ……」

ホントに受かってるかなあ……？　大丈夫かなあ？」

「大丈夫だよ。大丈夫。」

宿^{なだ}めること約30分。

ようやく紘が泣き止んだ時には、既に7時を周^{まわ}っていた。

そそくさと夕飯を食べ、紘と一緒に家路につく。

紘を家に送り届けると、紘の母親がわざわざ出てきて、泰紘に丁寧に礼を言った。

「ごめんね、泰紘君。」

ホントにありがとう。」

「いや、大したことでませんし……気にしないでください。」

家に帰ると、母が満面の笑みで迎えてくれた。

自然に顔が綻^{ほころ}んだ。

「どうだった？」

「ああ……意外と解けたよ。
たぶん、大丈夫」

「そう。よかったね………ほっとしたわ、お母さん。」

「うん。」

珍しく早く帰っていた父も、心底嬉しそうだった。

紘は大丈夫かなあ・・・

ベッドに寝転がりながら考えていたとき、不意にベランダの窓がコンコン、と音を立てた。

16話（後書き）

試験の内容は、まったくもって私の空想です。

国立の二次でその日のうちに面接があるか！！とか思っても、突っ込まないでいただけると嬉しいですwww

17話

——コンコン——

音がする方を見やると、なんとそこには寝巻姿の紘が立っていた。

「え．．．？ ええ．．．！？
なんで？ なんでここにいの？」

泰紘はパニックを起こしながらも、2月の寒空の中紘を立たせておくわけにはいかないと思い、窓を開けた。

入ってくると同時に、紘は泰紘に抱きついた。

「え……………おい、どうした、紘？」

「……………」

「黙ってちゃわかんねーよ？ どうしたんだよ、夜だぞ？
もう寝ろよ。 お前だって疲れてんだろ？」

「……………だ…て……………」

「うん？ ごめ。聞こえなかった。 もう一回。」

「……………抱いて。私を抱いて、泰紘。」

はつきり、ゆつくりと告げられた紘の言葉に、泰紘は驚いた。

「え．．．？いや．．．抱くつて？

お前、変なこと考えてんじゃないやねーよな？ ホント、どうしたんだよ。」

「いいから抱いてよお．．．．．眠れないの．．．

ヒロが事故に遭^あつてから、眠れないの．．．．．！
事故に遭^あう前はずっと抱いてくれてたのに．．．．．体が火照^ほって眠れないの．．．．．」

「．．．．．え？ ちょっと待て。

俺とお前^{おまえ}つて．．．．．つまり．．．寝て（．．．）たんか？」

「そうだよ．．．．．事故の前まではね．．．っ

事故の後ヒロは記憶失くしちゃったでしょ？　．．．．私がどんなに我慢してたかわかる？」

「．．．．．そんなこと．．．突然言われたって．．．ちよつと待つて．．？　つか、紘、最初に俺に会った時、遠縁って言ったよな？」

「違うよ。そんなわけないじゃん．．．．．本気で信じてたんだ。

ねえ、いいから抱いて？

．．．．．もしかして．．．抱き方忘れちゃった？」

「お、おい．．．何気に失礼な事言つてやがんな．．．．．そうじゃなくて．．．お前、ホントに今日変だぞ？」

「変でも何でもいいから．．．もう我慢できない．．．．．受験も終わったし、いいでしょう．．．．．？
ヒロはイヤ？」

「いや、だから．．．嫌とかじゃなくてさ、大体セックスって好きな人同士でやるもんだぞ？」

わかつてんのか？　お前、俺の事、別にそういう感じの好き（．．．）じゃないだろ。」

「好き・・・だよ。事故の前は、私達恋人だったんだよ？
ヒロが忘れちゃってるだけ・・・思い出してよ・・・ねえ・・・
思い出してよ・・・」

「そんなこと言われたって・・・しよーがねーじゃん・・・
思い出したくても思い出せねーんだよ。」

「・・・そうだよね・・・ごめん。無理言って・・・」

でも、私はどうしたらいい？好きな人を目の前にしても、記憶がないから恋人らしいこと何一つできない・・・おかしくなりそうだよ。」

「ごめん・・・本当にごめん・・・」

「そんなに謝らないで。ヒロが悪くないのはわかってるから・・・
けど・・・」

「けど？」

「やっぱり、抱く気にはなれない・・・？」

「なあ、今は止めとこうぜ。俺だって紘のこと好きだよ。そういう対象として見てる。けどさ・・・紘、今の俺に抱かれて本

当に嬉しいか？　だめだろ。きっと。

頑張って記憶戻るようにするから、それまで待っててくれないか？」

「……………辛い……………だって……………いつ記憶が戻るかなんて誰にもわからない。

お医者さんも、もう戻らないかもしれないって言ってたし……………」

「もしかしたら、だろ？　なあ、俺達、好きあってるんだろ？

急ぐ必要無いだろ。俺も、紘以外に好きな人作んない。俺の記憶が戻るまでだから……………頼む……………」

「うん……………そうだね……………そうだね……………」

だが、紘の焦りは消えなかった。

早く記憶を取り戻さないと、遼が本当に消えてしまうような気がしていたのだ……………

中々動こうとしない紘を見て、泰紘は観念した。

「ああ……もう……

おい、紘。抱きはしない。けど、一緒に寝てやるよ。」「
ち来い。」

「……いいの?」

「いいのって、お前……さっきから動こうとしないのは何処のど
いつだよ。」

俺だって眠いんだぞ……。」

「ホントに、いいの……? 嬉しい……。」

「そのかわり!

親にバレたら大変だから、明日の朝は早めに起きるぞ。いいな
?」

「うんっ／＼／＼」

嬉しそうに笑う紘を見て、泰紘はホッとした。

目覚ましを5：40にセットし、二人は布団に入り抱き合って眠った……

「おい、紘。ちょっと起きて……」

紘が起こされたのは、2時を少しまわった頃だった。

17話（後書き）

一応・・・二人のいつもの起床時間は、6：30です。健康的！
5：40というのは・・・適当な考えです。。。

まあ、この時間に起きればまず見つからないだろうと思ってww

18話（前書き）

試験前なので、この話でいったん更新が止まります。。。
ご容赦くださいm（――）m

18話

「おい……おい、紘。ちょっと起きて。」

「……………うう……ん？」

紘は無理矢理起こされて少々ご機嫌斜めだ。

だが、泰紘の次の一言で一瞬にして目が覚めた。

「起きて。俺だよ．．．．．遼だ。」

「え!？」

「久しぶり．．．．．になるんだよな。」

「遼？ ホントに遼？

泰紘じゃないの？ ホントに．．．．．?」

「うん。俺だよ。」

「なんでこんな事になっちったのかって言われると長いんだけど．．．」

「言つて？ 私聞くから。」

紘は何が何でも聞きたかった。

紘の性格を知り尽くしている遼は、決意したように一度ゆっくりと瞬きをすると、話し始めた。

「信号渡つてたらさ、いきなり車が突っ込んで来たんだよ。その先にちっさな女の子がいて。

小さい頃のお前に似てたんだよ……その子見たら、体が勝手に動いて……

あの子、無事だったんだって？ 良かったよ。せつかく命張ったのに、助けられなかったら意味ないからなあ。

目が覚めたのは、泰紘と同時だな。でも、こいつは俺に気づいてない。

っていうかさあ、今の状態ってもしかしくなくても二重人格ってやつだよ……？

まったく……ホントに俺がワケわかんねーよ。

んで……目が覚めたはいいんだけど。俺、最初に人呼ぼうとしたんだよ。そしたら、声が出なくて……後遺症かと思ったけど、なんか違うんだよな。

今の状態？ 意識がモヤモヤしてんの。

変だな〜って思ったら、母さん来て。声かけようとしたら、ビツクリしたよ……勝手に口が動くんだよ。『誰ですか』だってよ。

そりゃ、母さんも驚くわ。何にも言わないで病室出てっちゃっ

たかと思いきや、すぐに医者連れて駆け込んできたもんな。

泰紘は記憶もへったくれも無いもんな．．．．母さんが必死に、記憶喪失のことと自分のこと説明しても、はあ？って感じで聞いてたんだよ。

まあ、信じてくれただけ良しとするか．．．．ふう。 疲れる．．．．．

大体、二重人格だって勝手に名前作らないだろ。 俺、どうかしてるよ。

あゝ．．．嫌んなる。

で、とにかく俺は出ようと思っても出らんなくて。 でも、意識はいつつもあるんだよ。

泰紘のやつてることは全部見えてた。

俺、言うなれば今、ただの精神体じゃん？ だから疲れないし、夜も寝なくて済むんだよ。

泰紘が寝た後、試しにちょっと動くかなってやったら、動いたんだよ！

ありゃあ嬉しかったな。 でも、動くってたって夜だから出歩けないし、次の日があるから体も休ませないといけないだろ？ 紘には伝えたかったけど、昼は出てこらんないからさ。

俺、どうすりゃいいんだろ？ ．．．紘に言っても困るよな。

．．．．．とまあ、こんなとこなんだけど、何か質問ある．．．？

・・・・・・・・・・

紘は、長い間黙っていた。

さすがに声を掛けようかと遼が思い始めた時、紘が口を開いた。

「じゃあ、遼は今、夜しか出てこられないの？」

「ああ。」

「そんな・・・そんなことってないよ・・・
せっかく会えたと思ったのに。別に、泰紘のことが嫌いなわけ
じゃないよ？」

たしかに、最初はすごい抵抗あったけど・・・もう慣れたから。
でも・・・やっぱり遼と会っちゃうと・・・どうやって明
日泰紘の顔を見ればいい？

絶対、昨日までと同じようにはつきあえないよ。」

「そんなこと言ってもなあ。

俺だってできれば戻りたいよ。でも、今無理だろ、どう考えたって。

っていうか……最悪、俺が消えてホントに泰紘になることだつてありえるだろ？」

「イヤ！！ そんなの嫌！

だめだよ！ 遼が消えちゃだめ！ 絶対だめ！」

「……だから……そんなこと言っただって、もしそうならもおかしくないだろ。

それに、もし、だぞ。もし。

そうなる確率なんてわかんないんだから。 な？

落ち着け。」

「だめだよ……私は遼がいないと生きていけない……」

「なんでそうなっちゃうかなあ……」

「……っ

遼は私がいなくても生きていけるの！？ 好きでいてくれてたん

じゃないの!?

遼は……私なんてどうでもいいの?」

「はぁ……もう。」

お前ってなんでそんなに事を深刻にするかなあ?

俺だって紘のこと好きだよ。

でも、もしだぞ? お前が事故で死んでも、俺は生きていけないく
くって泣いてらんないの。わかる?

もちろん悲しいよ、そんなことになっちつたら。でも、お前、
俺がずくくと女々しく泣いて一生終えたら、気味悪いだろ。」

「う……でも……っ」

「大丈夫だよ。いつか戻れるだろ。」

それまで気長に待とう? そのくらい我慢できるだろ?」

「……うん……」

ねえ、夜しか出てこらんないなら……また前みたいにウチ
に来て?

ね……しょ?

さっきの話聞いてたんでしょう?

ホントに、もう我慢できないの………お願い。」

「俺がお前の『お願い』に弱いのは知ってるだろ・・・やめてくれよ、それ・・・」

はぁ・・・いいのか？ 泰紘は知らないんだぞ？」

「いいの。だって元々私の恋人は遼だもん。
好きな人とセックスして何が悪いの。」

「・・・わかった。明日、おまえんち行くよ。
でも、2日に1回な。
泰紘も体力的にキツイだろうしな。」

「うん！！
ホントにありがとう。本当に・・・戻ってきてくれて、ありがとう。」

「俺こそ、危ないこととしてゴメン。ホントに悲しませたな・・・」

「ううん。遼がそういう性格だって知ってるから・・・聞いたとき呆れたけど、遼だなあって思った。」

こうして、紘と遼は約1か月半ぶりに再会できたのだった――

紘は、翌日の夜が待ち遠しかった。

幸せで、幸せで………久しぶりに、夢も見ないほどの深い眠りについた。

18話（後書き）

こんばんは。。。

ちよっとお知らせです〜。

実は・・・あと約1週間で学年末考査があるんですね・・・

その勉強をしなくてはならないので・・・おそらく、2週間ほど更新が止まります><

もし更新されてたら、逆に、テストはどうしたんだ〜！と突っ込んでください。

終わったら、それまでできなかった分頑張って更新させていただきます！

それでは、皆さん。読んでくれてありがとうございます！！

では、2週間ほど後にまたお会いませうww

お知らせです。。

こんにちは。お久しぶりです。

この度の地震は大変でしたね。私の家も、少しですが被害を受けました。。

作品の方ですが・・・地震のことと、後は私自身の諸事情により、今執筆を進められません。

大変申し訳ありませんが、当分は更新がないものと思っていただけると幸いです。

今年、私は高3になるので、執筆がほとんどできないかもしれません。

一年更新できないかもしれません><

本当にすみません！

でも、受験が終わったら、絶対にこの作品を仕上げます。

・・・ということで、更新はおそらく一旦中断ということになると思います。

更新したとしても、結構不定期になります。

勝手ですが、お知らせだけさせていただきますました。

何かありましたら、感想欄にお願いします。。

19話（前書き）

なんとかやつと投稿できました・・・！
ふう。

19話

朝

私は起きてからずっと上機嫌。

眠そうにしている泰紘に軽く口付けると、静かに自宅に帰った。

何もすることがないから、昼間も泰紘の家に行ってくだらない話をしていた。

だが、何をしていても考えているのは遼のことだけ。
夜のことを考えると、もう天にも昇る思いだった。

とうとう待ちわびた夜がやってきた

コンコンッ

待ってましたとばかりに私は遼を迎え入れる。

「遼っ!!」

「絃………久しぶり。」

「ん……」

私は遼が次の言葉を口にする前に、彼の唇に吸い付いた。

「ん………うふ……」

「……ん……」

遼（泰絃）も、あれから自分で抜いていなかったのだろう。
少し愛撫し合っただけで、遼のモノは堅くなった。

「一回抜いてあげる……」

「お、おい……?」

そう言って私が彼のモノをやりわりと握りこんで刺激してやると、
遼は快楽に顔を歪ませた。

「は……あつ………お前……」

私が一方的に遼の体を愛撫するのは初めての気がする。

私は、遼の追い立てられた表情にうつとりして行為を続けていた。

「・・・ちょ・・・もう・・・っ・・・あぁっ・・・」

遼の限界が近づいてきたことがわかった。

私は、何の躊躇もなく彼を口に含んだ。

「・・・ええ・・・！？　おい・・・っ・・・紘お！」

遼は、初めての感覚に戸惑っている。　それに私はまた興奮してしまった。

「ね・・・出していいよ。　飲んだげる。んふっ・・・」

「紘・・・なんっ・・・で・・・う・・・ああああっ・・・」

私が一際強く彼を吸い上げると、遼は耐え切れなくなって私の口の中に欲望を吐き出した。

思ったより量の多いそれを、何とか嚥^{えんか}下する。

「くふ・・・うんっ」

—— はあ・・・はっ・・・

「ね・・・気持ちよかった？」

「は・・・あ・・・お前、いつこんな事覚えたんだよ。・・・
っ」

「色々だよ」

あ、でも心配しないで。実践はこれが初めてだから！」

「・・・っ！ 当ったり前だろ！！」

遼の息がまだ落ち着かない内に、私はまた遼に刺激を与え始めた。

「！！ちよつと待てっ

俺だけなんてずるいぞ！ 次はお前だろ・・・！！」

言っつや否や、遼は私を押し倒してきた。

「ん．．ふうあ．．．．あんっ」

さすが私の体を知り尽くしているだけあって、私もすぐに高みに追いやられる。

「ああ．．っ．．．りよ．．う．．．．そろそろ．．．」

「あ．．．．！ やべえ．．．」

「どうしたの？」

「アレ、忘れちった。」

「．．．ああ。 今日はいいよ。 大丈夫な日だから．．．．」

「ホントか？．．じゃあ．．．．．」

遼は裸の自身をあてがうと、ゆっくりと私の中に入ってきた。

「はあ．．．．っ．．ん．．．．．ふえっ」

「ん．．く．．．．．」

一ヶ月近くしていなかったのに、私のあそこは遼のモノを難なく啜^{くわ}え込んだ。

ゆっくりと動かされると意識が飛びそうになる。

「絃．．．お前、ヤバイ．．．中グチャグチャ．．．めっちゃ気持ちイイ．．．」

遼の声も私を追い立てていく。

「ああ．．．も．．．うつ．．．いつちゃう！」

「イケよ．．．ほら．．．っ」

これまでよりも激しく突かれ、私はとうとう理性が飛んだ。

「．．．あああああっ．．．！！！」

「くう．．っ」

私の中に、直接遼の精液がまけられる。

それはとても温かくて．．．私は遼にしがみついた。

「私ね．．．今、すっごく幸せ．．．」
「ん．．．俺も。」

「でもさ・・・遼は昼間出て来られないじゃない・・・私、どうしたらいい？」

「・・・普通に接してくれよ。泰紘だって困るだろ・・・」

「そうだけど、でも・・・私には遼がいるのに、同じ顔して中身だけ違う泰紘とも仲良くなんて。

そんな器用なこと、私できないよ・・・」

「大丈夫だから・・・な・・・？」

「ねえ・・お願い。明日も来て？お願い！」

「ダメだって。泰紘には負担かけられない。」

「だって・・・今まで毎日シテたんだから、大丈夫だよお。大したことないって・・・」

「おい・・・俺もお前も良くて、泰紘は何にも知らないんだぞ？悪いとか思わないんかよ？そのくらい我慢しろって。」

我慢しろ

その言葉を聞いた途端、私の頭の中で何かがプツツと切れた。

「我慢はもう嫌！！もう我慢はしたもんっ
遼は何ともないの！？ 1ヶ月も触れられなくて、私はホントにお
かしくなりそうだった・・・
そんな思いは、もう十分。」

「・・・そうだな。ごめんな。

俺だって泰紘の中からずっとお前を見てるだけだったのは、本当に
苦しかった。

意識はあるのに触れられないのは、つらかったな・・・なあ・・・

「

「ね・・・もう一回。もう一回、中にシて？」

「ああ・・・俺も入りたい・・・ナマで入れられる時なんて無
いもんな。

据え膳食わぬは男の恥ってな。」

「もう・・・！」

ん・・・ふ・・・ああ・・・はあ・・・

ふう・・・んくう・・・っあ・・・うあ・・・ん・・・

二人の呼吸が混ざり合う。

この時間が、紘が一番好きだった。

もちろん絶頂を迎える瞬間が一番気持ちいいのだが、好きなのはこの時間だった。

一体になっているのが最も実感できる、この時が……

夜が明けるまで、二人は互いに激しく求め合った。

それこそ休む間も無く、1ヶ月の溝を埋めようとするかのよう。

19話（後書き）

次回はいつになるかわかりませんが・・・お待ちください！><

20話（前書き）

こんにちは。

エイプリルフルですね！

午前中しか嘘をついてはいけないうてご存知ですか？？
午後は、ついた嘘をバラして謝る時間なんですってw w

20話

「・・・紘。そろそろ俺、帰るから。」

「う・・・ん・・・あ、遼！帰っちゃうの・・・」

「しょうがないだろ。親にも泰紘にもバレないようにしないとねーんだから。」

「うん・・・ね、今日も来て？お願い。」

「おい・・・最初は2日に1回だったのに。わがままだぞ、紘。」

「だって・・・ねえ、お願い。抱いてくれなくてもいいから！一緒に寝てくれるだけでいいから。・・・お願い」

「俺がそれじゃ困るんだよ！まったく・・・」

「紘と一緒にいると反応しちゃうんだよ！こんな事言わせんな、アホ！」

「いいじゃない。毎日抱いてよ。ね？」

「う~~~~・・・」

「ねえ・・・」

「あゝ、もう！ 今日起きたときに考える！来なくても恨むなよ！
泰紘だっておかしいってわかつちまうぞ・・・体はだませないん
だから・・・」

「うん。待ってる！」

私は、遼が今日も来てくれると信じて疑わなかった。

何せ、遼が私の「お願い」を聞かなかったことなどない。

夜が待ち遠しいと思った。

遼が事故に遭ってから無くなっていた感情だった。遼のいない夜な
んて来ないでほしいと、願っていた。でも、今は・・・夜だけ
だが遼がいてくれる。

幸せだった。

一方――

泰紘は、起きると違和感に襲われた。

．．．．やけに体が軽い．．．．なんで？．．．．最近結構辛かったのに．．．．？？

泰紘は体の事がよくわかっていなかった。

自問自答する泰紘を、意識の内側にいる遼は哀れみをこめて見守っていた．．．

――ごめん、泰紘．．．そしてありがとう！全然わかってなくて――

その日、泰紘と私は、一緒にショッピングに出かけた。

最初はお母さんもついてくるって言っていたけれど、そんなの「めんだから何とかやめてもらった。」

泰紘も心なしか楽しそう。

遼はシヨップینگ嫌いだったけど（でも私が誘うといつもついてきてくれたけど／＼／）・・・泰紘はそうじゃないのかなあ？

「ねえヒロ、なんでそんなに今日機嫌がいいの？」

「ああ、聞いてよ！」

最近体がだるくて辛かったのにさ、今日起きたらスッキリ治ってたんだよ！

最高！！ 何でだかわかんないのは微妙だけど、やっぱりいいね！体が思うように動くって。」

・・・・・・

「・・・そっか。そりゃよかったね！」

「おう！ホント気分いいわ。」

「・・・これって・・・「抜いた」からだよね。」

泰紘、全然わかってないの！？ ちよつと・・・男としてどうよ？

それ。

そりゃ、わかんないでいてくれた方が私達にとっちゃ都合いいけどさ。

何か・・・ちょっと可哀想かも。

結局、その日はウィンドウショッピングで一日が終わった。

でも、私は夜のことを考えるとルンルンだし、泰紘も体が良くなつて幸せそうだったし。

それでいいよね？

夜

私はきちんと身支度を整えて遼を待っていた。

……が、なかなか来ない。

まさか、本当に来ない気……！？

悶々として布団に入っていると、コンコン、と聞き慣れた音が響いた。

「遅いつ！」

怒りながら開けた窓の外にいたのは……

「え……？『遅い』って？」

遠じゃなかった

20話（後書き）

少し短い・・・ですね？

21話

「遅い!!」

「え．．．？『遅い』って？」

開いた窓の外にいたのは、遼ではなかった。

「泰紘っ!？．．．．．なんで．．？」

泰紘の口から出た言葉は、私のキャパシティを遙かに超えていた。

「……遼に聞いた、いや・遼が書いた物を読んだんだ。それで、分からない事は紘に聞けつて。」

まさかの展開に私はパニック寸前だった。

「え……？ヒロ、遼に会ったの……？
どういう事？……なんで？」

「……俺が聞きたいんだけど。」
そう言った泰紘の言葉には戸惑いと苛立ちが含まれていた。

「え……でも……」

私の心は、中々落ち着いてくれなくて。

「遼がそんな事するはずが……なんで……？
遼がヒロに全部教えたの……？」

「そつだよ。信じられない事ばっかだけど。っていうか、ありえね・

・

でも、事故の前の記憶が全く無いのとか、そういう事考えれば・
まあ・・・・

それに・・・・今、お前が『遼』を肯定したし。・・・・だろ？

何言われても受け止めるから・・・・全部話してくんないか？
俺、このままだとキツイわ・・・・」

私の頭は今フル回転中。

泰紘は多分全部知ってしまった。

今わざわざここに来ているのは、感情が理性についてこられてないから。

すべてを知っているはずの私のところに「助け」を求めに来たのだろう。

自分がこれからどうすべきか。

・・・・どうすれば良いのか。

私はどうすればいいだろう。

そんなのは嘘だ、気にするなとはぐらかしてしまっことだって、やるうと思えばできるだろ。

でも、きつと泰紘はそれを望んではいない。
だからこそ私のところに来た。

でも、全てを話す・・・？
それも、私の心が拒否する。

遼は、私だけのもの・・・誰にも知られない、私達二人だけの関係。

壊されたくない。

何を考えて遼は泰紘に手紙なんて書いたのだろう。

私には理解できない。

遼は、私との関係なんて気に留めないのだろうか・・・
そんなはずはない・・・そんなはずはないと思うけれど、私にはわからない。

でも、とにかく今私の目の前にいるのは泰紘。
彼を何とかしなければならぬ。

私以上に戸惑っているはず・・・でも・・・

漸^{おそ}う私は口を開いた。

「ねえ、泰紘。

遼が書いた手紙、見せてもらってもいい？」

「ああ・・・いいけど・・・ちょっと待ってて。」

泰紘が部屋を出て行くとホッとした。

心の整理がつかないままだと、泰紘にも遼にもひどいことを言ってしまうそう。

泰紘が再び部屋に来るまで、私は深呼吸を繰り返していた。

遼の手紙はこう始まっていた。

「もう一人の俺、泰紘へ

突然こんな手紙が机の上に置いてあって、びっくりしただろう。

内容はもつと驚くような物だけれど、全部本当のことだから、信じて欲しい。」

内容は、私が想像したとおり。

本当に全て（・・・）が書いてあった。

本当は泰紘などという人物はいないこと。「泰紘」は先日事故で意識を失った遼の代わりに勝手に作り出された人格であること。

事故のいきさつ。事故以前の私と遼の関係。等・・・

極めつけは、つい昨日、泰紘が寝た後で私と遼が寝たこと。

最後は

「何かわからないことがあったら紘に聞いて欲しい。

彼女は全部知っているから。聞けば、教えてくれるはず。

本当はサシで話したいけど、お前が起きている間は俺は出てこれないから。

最後に・・・紘に、本当にごめんって伝えておいて欲しい。じやあ。」

という言葉で締めくくられていた。

私は、悲しくなると同時に、無性に恥ずかしくなった。

遼は、今のままでは互いにますます辛くなってしまいうことがわかっていた。

だから、この状態を打開するためにも、こんな強行手段をとったのだ。

私だって、このままで良いとは思っていなかった。

が、せつかく出来た遼との時間を潰したくない、二人だけの秘密の関係をそのまま続けたい、と。そのことだけを考えて、泰紘のことは敢えて考えないようにしてきた。

そんな自己中心的な考えをしていた自分が、とても恥ずかしかった。

「……うん。わかった。

それで、泰紘は何が聞きたい？ なんでも答えるよ。」

逃げ出しそうになる体を叱咤^{しった}し、懸命に笑顔を浮かべて私は泰紘を見上げた。

もう誤魔化せない．．．．．覚悟は決まった。

泰紘に何と言われようと、私には全てに答える義務がある。
今まで裏切ってきたのだから．．．．．

22話（前書き）

こんにちは♪

今回は、泰紘&遼視点です。

22話

「何が聞きたい？」

そう言われて初めて、本当は聞きたい事なんて無いことに気付いた。

紘の諦めたような表情かおを見て、全部納得してしまった。

自分は、本当はいるべきでない人間であること。

いてはいけない、ということ・・・

でも、どうすれば良い？

俺は何もできない。

紘のために「遼」に体を譲ることもできない。

そしてこんな事を考えている俺を、そいつは俺の内側から見て知っている。

俺はどうすれば良いだろう……こんな事考える前に、何か
紘に言わないといけないのに。

言葉が浮かばない。

「泰紘？　どうかした？」

何でも聞いていいよ。答えるよ。」

紘が、困ったように俺を見ている。

そんなこと言われても、俺だって困ってるんだ。

大体、紘は遼のこと隠してたじゃないか。

辛くないとは正直言えないけど、それでも言っただけ良かった。

事故の後の不安定な気持ちだって、本当のことを話してもらえてい
たらそんなに酷くなかったかもしれない。

ああ……イライラしてきた。

なんで俺はこんな目に遭わなきゃなんないんだ？

俺は何にも悪いことしてないのに。

それに、遼ってヤツ・・・紘と寝た（・・・）って・・・

そりゃ、事故の前はそいつの体だっただろうけど、今は俺の体なんだぞ・・・？

意識が戻るのが夜の間だけだからって、やっていい事と悪い事があるだろ。

俺はどうなるんだよ。

紘も紘だ・・・二人だけで気持ち良くなっちゃまって、俺の気持ちなんてどうでもいいんだろうな。

そりゃそうか。

俺が（・・・）元々邪魔者なんだから。
いちやいけかったんだから。

でも、俺はどうにもできない。

どうにかしたくても、手立てが無い。

なあ、遼。 お前俺が腹ん中で考えてること全部わかんדר？
何か解決策を教えてくれよ。

紘にとつちや俺なんてどうでもいいんだよ。
お前さえいれば紘は満足するんだよ。

俺だって、お前と替わってやりたい。

俺のこと見てくれない紘の隣にいたって辛いだけなんだよ。

俺が遼と替わってやれば、紘は喜ぶだろ？

お前も嬉しいだろ？

意識の中からお前を通して紘が見られればいいよ。
幸せな紘が見られればそれでいいよ。

．．．だから、俺と替わってよ．．．

「え？ 泰紘！？．．．どうしたの？」

「え．．．．．」

俺は、いつの間にか泣いていた。

ビックリして涙を止めようと思ったけれど、意に反して止まらない。

気持ちの收拾がつかないまま、俺は声を殺して泣いていた。
声を出さないのは、自分の心に対する精一杯の抵抗だった。

何が悲しいのかわからないけど、とにかく悲しい。

「泰紘・・・・・・・・」

顔を上げると、悲しそうな表情の紘がいる。

その瞬間、何が悲しいのかわかってしまった。

俺に向けられた笑顔も、怒り顔も、全ては俺の中にいる遼に向けられたものだった。

紘の感情が本当に（・・・）俺に向けられたことなど、数えるくらいしかなかったんだろう。

いや、一度だってそんな事は無かったのかもしれない。

俺の存在はそれほどまでに小さかったのだ。単に遼の存在が大きす

ぎただけなのかもしれないが、それは俺にとって大した問題じゃない。

自分の大切な存在にとって、自分がちっぽけな存在であったこと。それを無意識に理解して、俺は悲しくなってしまったんだ。

でも・・・今俺に見せている表情は、俺のためのものだ。

俺のためだけに見せる表情・・・・・・・・

泣いていることも忘れて、俺は紘に見入ってしまった。

紘は何も言わない俺を不審に思っているだろう。

不審に思われてもいいから、どう思われてもいいから、俺は紘を見続けていたかった。

初めて俺を見てくれた。

もう、それだけでいい。

それだけで十分だよ。　なあ、遼。

俺はこれ以上望んじやいけない。　そう思うだろ？

だからさ・・・俺がこれ以上辛い思いしないように、早く替わってくれよ。　遼。

声が聞こえる

——もういいから、俺と替わって・・・

ああ・・・辛い思いをさせてしまった。

紘も辛い思いをしているけど、泰紘はもっと辛いだろう。

本当にすまないことをした・・・

でも・・・多分、俺にはもう時間が無い（……………）。

今出て行っても、二人をもっと傷つけてしまうことにならないだろうか。

俺がいなくなったとき、紘にどんな顔をさせてしまうか。泰紘がどれだけ自分を責めてしまうか。

容易に想像がつくから、出て行くのが躊躇ためらわれるんだ。

もう時間が無いとわかっているから、紘を任せられるようにお前に全て伝えたのに。

それが重荷になると知っていても敢あえて伝えたのに。

間違っていたのだろうか。

声が大きくなる

——もう、替わって……！　これ以上辛くなる前に・
・！

．．．．．！！

そんなに辛いのか、泰紘．．．ごめんなあ．．．．．

俺が事故なんかには遭わなければ、誰も何も悲しまなくて済んだのに。

．．．．．決めた。

俺は、泰紘のために替わってやらなければいけない。

紘のためじゃない。 泰紘のために。

それが、後に二人を傷つけてしまうとしても．．．．．

——ごめんな、泰紘．．．もう、いいよ。替わるよ。．．．．．時が来るまで（．．．．．）、ゆっくり休みな。

でも、その時が来たら、紘を頼むよ．．．？

声が聞こえると同時に、俺の意識が闇に引つ張られていく。

「その時」って……？

心の中の問いに答える声は哀しさを含んでいたけれど、優しかった。

その^{こた}えを聞いて、俺は愕然とした……

22話（後書き）

感想お待ちしています！

23話（前書き）

今回は、紘&遼視点です。

主に、前半が紘、後半が遼ですね。

23話

——もう、どうなっても仕方ない。

泰紘が望むなら、今だけでも辛いところから開放してやろう。

それが、俺ができる最期の償いだから………

泰紘の体が崩れ落ちる。

「泰紘!？」

突然の出来事に、パニックになる。

あの事故のときの様に、また大切な人を失う気がして、呼吸が苦しくなる。

眩暈めまいがする。

「泰紘！？　ねえ、泰紘・・・？」

飛びそうな意識を無理矢理留めて必死に泰紘の名前を呼んでいると、彼は突然目を開けた。

「・・・！！　良かったあ・・・泰紘、どうしたのかと思っちゃったよぉ・・・」

ホッとすると、急に目頭が熱くなった。

「・・・っ・・・泰紘お・・・遼みたいに・・・いなくなっちゃったかもしれないって、思ったんだからね・・・っひくっ・・・」

「……ごめん……ごめんな、紘。
辛い思いを、させちゃったな……泰紘にも……」

泰紘のものとは違う、聞き親しんだ声にビックリして顔を上げると、
遼が悲しそうに微笑んでいた。

「遼……？ 遼？
……なんで？ 泰紘は……？ あれ……？ さっきまで泰紘
だったのに、なんで？」

私の頭は、次々に起こる予想もできない出来事に翻弄ほんろうされていた。

「考えなくていいよ。 紘は、何も考えなくていいから。
……大丈夫。 もう、俺がいるから。 大丈夫だから。
もう、何にも心配するな。 泣くなよ……俺が、いてや
るから。」

私は、まるで催眠術にかけられたようにボンヤリしながら、遼の言葉を聴いていた。

「ホントに・・・？ 遼が、いてくれるの？
何にも、考えなくていい？ ヒツ・・・ク・・・ホントに・・・？」

遼は私を、幼子おさなこを見つめるような眼差しで、緩い笑みを浮かべて見つめて抱きかかえた。

「いいよ。絃が落ち着くまで、抱いててやる。
だから・・・少し落ち着け。・・・な？」

しばらく遼の腕の中で揺らされて少し落ち着いた私の頭には、疑問が浮かんできた。

「遼・・・泰絃は？ 泰絃は、どうしたの？」

「聞きたいのか、それ・・・？」

「ん・・・」

「・・・泰紘は、眠りたいって言うから俺が内側に引っ張り込んでやった。」

「そう・・・泰紘ね、泣いてたんだよ。なんでだろう・・・泣くことなんてなかったのに。そりゃ、いきなりこんな事があったからビックリするのはわかるけど・・・泣くなんて、思わなかった・・・」

「そっか・・・」

「遼は、何か知らない？」

「ああ・・・わかんない。」

そんなことがあるわけない。

遼は、泰紘のことは全部わかってるはずだ。

それをはぐらかすって事は・・・私が原因なんだ・・・

・
ごめんね、泰紘。私には、何が悪かったのかわからないけれど、私が傷つけてしまったのには間違いないから。

俺には、紘が考えていることが容易に予想できた。

紘は頭が良い。俺が泰紘の心がわかる事も知っている。だから、俺が答えをはぐらかしてしまえばきっと、それは自分の所為^{せい}だと思うだろう。
教えてもらえなければ、それだけ酷い事を自分がしたんだと思うだろう。

でも……これは言えない。

紘が泰紘の中の俺を視^みていた事に傷ついてたなんて、間違っても言えない。

紘も、泰紘も、両方が悲しむ。 何の解決策もないのに。

俺も、泰紘の気持ちを考えると哀しくなった。

謝ることしかできない。

謝っても、どうにもならないことなのに。

もうすぐ、また泰紘をこっちに引つ張り出さなければならぬ日が来る。

いつかは未だはつきりとはわからないけど、刻々と近づいてきている事だけは、よくわかる。

それを伝えたときの泰紘の顔と言ったら・・・・・・・・俺以上に惨めな表情をしていた。

そりゃそうだ。

自分を（・・・・）見てくれない好きな女の前に、今度はその事実を突きつけられて、存在しなければいけないのだから。

俺だったら、そんなのゴメンだ。

とっとと消えちまいたい。

でも、泰紘はそれをしないだろう。

紘のためにも。

どんなに辛い想いしても、あいつは逃げないだろう。
いや、逃げられないんだ・・・・・・・・優しすぎて。

「遼・・・？」

呼ぶ声にハッとすると、紘が俺の顔を覗き込んでいた。

「遼、大丈夫？」

「あ、ああ。お前こそどうした？
顔が赤いぞ・・・？」

「え・・・っ！？ あ・・・あのさ・・・」

「何だよ・・・？」

「お願い、抱いて・・・？」
こんな時に不謹慎なのはわかってる・・・でも・・・我慢、でき・・・なくて・・・」

・・・！！

確かに不謹慎極まりない。　いつもだったら・・・相手が絃でも声を荒げてしまっていただろう。

でも・・・今は。

俺もいつまで絃と一緒にいられるか、正直わからない。

それに、絃がふしだらなわけじゃないのは、俺が一番よく知っている。

ずっと堪えていたものが、俺がいる、と安心してしまって溢れたんだろう。

全ては、俺の所為^{せい}。

だから、精一杯の償いをしよう・・・

「いいよ・・・我慢してたもんな。・・・おいで。
満足するまで抱いてやる。」

夢中だしがみついてきた紘の体は、程よく温かくて。

不覚にも涙が零れそ^{こぼ}うになった。

23話（後書き）

いつまで連載を続けられるか。。。不安ですが、精一杯書きます！

感想をお待ちしております♪

24話

・ふ・ ・ ・ あっ・ ・ ・ は・ ・ んう・ ・ ・

ん・ ・ ・ っ・ ・ ・ はあ・ ・ ・ ・ ・ ああん・ ・ ・

遼の唇が体の至る所を^{なぶ}舐る。

小6の時に覚えたそれは、とても心地^{こころ}好^{この}くて。

彼の体が触れるだけで、私の体は反応するようになってしまった。

そんな風にしてくれた遼が愛しくて愛しくて・ ・ ・ 私はきっと、
遼がいないと生きていけない。

だって、この体を鎮められるのは遼だけだから。

遼以外には、誰にも触れさせない。

たとえば、同じ顔をした泰紘であつても……………

魂の違う泰紘。

どうして泰紘が出来てしまったのだろう。

もう遼が帰ってきたのだから……こんな事思っちゃダメかもしれないけれど……泰紘は、いなくてもいいじゃない。

本当に、なんで未だ泰紘はいるのだろう。

遼は、休ませただけ、っていう内容の事を言つてた。

何故、休ませる必要がある……………？

そう考えて、突如、紘の頭に恐ろしい考えが浮かんだ。

まさか・・・・・・・・・・！！？

紘の体が、急にハッと強張ったのがわかった。

ああ、わかつちやったか・・・・・・・・

まあ、遅かれ早かれ分かる事だったけど・・・・・・・・自分で気付いちや

うなんてなあ…………

やっぱ、紘はアタマいいなあ。

でも、何て言おうか。

俺だって離れたくないよ…………紘…………ずっとお前といたいよ。

誰にも渡したくない。

泰紘にさえも。

でも、どうしようもないんだよ。もう、時間が無いんだよ。

俺は、もうすぐ消える……………

そうか……………

きつ……………元々俺の命は尽きてたんだ。

それを、俺の体は勝手に捻じ曲げちまった。

紘そはの傍にいたいが為に、他の人格を作り出してでも、俺自身がいなくなっても、生き延びたかったんだ………

漸すすく、わかった。

俺が消えなきゃいけない理由。

やっとわかったから、もういいや。

「遼………つくう………なん………で………?」

敢あえて尋ねてくる紘の歪んだ顔が愛しい。

「答えは、もうわかったんだろ?」

「………本当に、逝いっちゃうの………!?………つく………」

「うん．．．ごめんな、紘．．ごめん。
俺だって、消えたくないよ。消えたくないけど．．．もう、
無理なんだ。」

「．．．ふっ．．逝かないで．．．なんで、遼なの？　なんで、
泰紘じゃないの．．？」

「．．．ごめん。」

俺の話、聞きたい．．．？」

「．．．ひっ．．．つく．．．？」

「．．多分な、あの事故の時、ホントは俺、死んでたんだよ。　ホ
ントは、な。」

でも、紘から離れたなくて、生にしがみついたんだと思う。
．．．無理矢理命を永らえさせた代償が、きつとコレなんだよ。
俺は、本当は、もう存在してちゃいけないんだよ。

この体は消えない．．．紘の傍にいるって決めたから。
その代わり．．．俺は消えるんだ。

もうすぐ．．．ホントの限界が来るはず．．．いつ消える
かわかんないけど．．．近いのだけはわかる。」

「いやあ．．．行かないで．．．お願い．．．」

「無理だつて言っただろ。駄々こねるなよ．．．困らせないでくれ．．．．．」

「じゃあ．．．一緒に連れてつてよ。連れてつてよお．．．．．
遠がないなんて、耐えられない．．．．．」

「泰紘はどうなる？」

「．．．え？」

「泰紘は、どうなるんだ？」

俺が消えたら、アイツが出てくるんだ。お前の為に。俺の勝手で作り出したアイツが．．．ホントはきつと出てきたくななんてないだろうに、俺の願いを聞いてくれるんだ．．．

泰紘が出てきた時にお前がいなかったら、あいつは何の為にいるのかわかんないだろ．．．

おまえ自身の為にも、泰紘の為にも．．．何より俺の為に、生きててくれよ。

俺は、お前に生きてて欲しい。恨んでもいいよ。何て思ってもいい。

でも、自分で自分の未来は潰すなよ．．．．俺が悲しい．．．．

紘．．．お前が羨ましいよ。まだ生きられるお前が、すつげえ羨ましいよ。」

「．．．．．遼．．．．．ふえ．．．．．ひつく．．．．．」

「生きててくれるだろ？」

「．．．やだあ．．．遼がいなくなるなんて．．．いやあ．．．」

「紘．．．．．」

困ったなあ。

紘に泣かれるのが、一番堪^{こた}える。

自分のことは諦めもつくけど．．．紘を悲しませるのは、辛い。

でも、どうしようもない事だから．．．我慢してもらうしかない。

いつかきつと、俺を忘れられる日が来るだろう。

忘れられるのはすごく悲しいけど、でも、紘の為には忘れてもらう

しかない。

どうすれば、忘れてもらえるか……

ああ。

一つ、不確定だけど、方法がある……俺を忘れてもらえる方法がある。

試してみるか……？

善は急げ、だ。

俺が消える前に、やってしまおう。

「絃・・・お前の願いは、聞けない。ごめん。
でも、辛いのはきつと、取り除いてやれるよ・・・
なあ、今は・・・さっきの続き、しないか？」

「

「つぶ・・・続き・・・？・・・
したい。」

「うん、しよ。」

絃を満足させて、終わりにしよう。

なるべく早く・・・明日にでも、なるべく確実なやり方を見つけて、絃を楽にしてやるう。

24話（後書き）

なんか・・・下書き無しで心の動くままに書いてしまってますが・・・
・話のつなががうまくいっている自信がありません><

読んでいて、はぁ？と思ってしまった方、いましたら、本当にすみません！

25話（前書き）

お久しぶり（？）です。

これからも非常に不定期な更新になると思いますが、なにとぞご容赦ください！

25話

・
・
・
・
・
ん
・
・
っ
ふ
・
・
・
・
・
・
う
う
ん
・
・
・
・
・
は
・
・
ふ
・

あつ　　ん　　つ　　は　　はあ

俺と紘の呼吸が交わる。

交ざって、一つになる……。いつか絃が、この瞬間が一番好きだって話してたけど……。俺もこの瞬間が一番かもしれないなあ。

果てる時は最高に開放されるけど・・やっぱり一番紘とヤツてるって実感できるのは、この瞬間かな。

それも、今日で終わらせる。

俺のことは忘れてもらわなくちゃ。

でも………やっぱり、忘れて欲しくないよ、紘。

俺のこと覚えてほしい………せめて………

「ああ……つ………遼………!………」

紘の敏感な場所に舌を這わせると、紘はたまらないような顔をして俺を見ってくる。

額、目元、首筋、鎖骨、乳首、乳房、わき腹………少々キツ

めにキスし、同時に舌でなめながら少しずつ場所を降ろしていくと、その度に、紘の体がピクツとはねる。

なあ。紘。

俺はお前に、何か遺^{のこ}して逝きたい。何を遺せるだろう。

「・・・ふあっ・・・・・・りよ・・・遼・・・！・・・・・・も・・・
ダメエ・・・・・・」

「いいよ、イケよ・・・」

「んう・・・はあっ・・・・・・あああああ・・・・・・つつ！・・・！」

まだ中心に辿り着いてもいないのに、紘は絶頂を迎えた。

「そんなに気持ち良かった・・・か・・・？」

「う・・・んっ！ うん！」

荒く息をつきながら、瞳を潤ませて俺を見る紘は。自分では気づいてないだろうが、この上なく扇情的で・・・

この存在を手放す日が来るなんて、思いもしなかったのに。

もう自分には時間が残されていなくて。

この事に気づいてしまって、俺は地獄の底を垣間見た気がした。

どれだけ絶望しただろう。　もう覚えてもいないほど、覚えていないほど。

「・・・ねえ・・・っ　遼う・・・も・・・我慢・・・できな・・・
もう・・・おねが・・・いつ・・・お願いっ・・・!!・・・
」

「うん・・・?どうして欲しい?
きちんと言わないと、俺、わかんないよ・・・?」

「ふえ・・・っ・・・りょ・・・はあっ・・・いじ・・・わる・・・あぁっ」

言葉では焦らしながら、指をじわじわと核心に近づけていく。

時折ヒュツと花芽を掠めると、紘は耐えられない、というように可愛い声を上げてイヤイヤと首を振る。

その様子がまた、俺の心の雄を奮わせる。

「・・・あつ・・・りよ・・・う・・・も・・・いやあつ・・・
・我慢、でき・・・なあ・・・！
いじわ・・・る、しないで・・・っ」

「だって、紘・・・俺はお前じゃないんだから。心が読めるわけでもないしな。して欲しい事は、自分の口で言わなきゃわかんないぞ？」

クスクスと笑いながら優しく苛めてやると、さっきから潤んでいた紘の瞳から、涙が滑り落ちた。

そういえば、ここまで焦らしてイジめたことはなかったかもしれない。

いつもは俺の方がすぐにヤバくなってたから・・・でも、今日は。最後だと思うと、断然持ち（・・・）が違う。

「・・・そんなに嫌だったか？」

動きを止めていかにも心配そうに紘の顔を覗き込むと、紘はビクツとした直後、真っ赤になってボソボソと口を開いた。

「遼の・・・いじわるっ／＼／
・・・嫌なわけ、ないじゃないっ・・・もう、イかせ
てよ・・・遼ので、イかせて・・・お願い・・・」

「声が小さくて聞こえないよ。ね、紘。言葉って何の為にあるか
知ってるよね？
人に伝える為にあんだよ？きちんと伝わるように言わなくちゃ・・・
・・・な？」

「~~~~~っ・・・遼のが、欲しいっ！・・・
・・・もう、イヤ・・・」

「うん、今は聞こえたよ・・・いい子だな。」

「子供扱い・・・しないでっ・・・」

「だって、紘、まだ子供だろ。ははっ・・・」

中断したことで逆に敏感になったのか、体に触れた途端、紘が甘い声で啼^なき始めた。

「あああ．．．ん．．．．．遼う．．．挿れてっ．．．．．もう、いれて！．．．欲しいのっっ」

一度理性の箍^{たが}が外れた紘は、こうなったらすることをするまで、元には戻らない。

「．．．．じゃあさ。せつかくだから、紘、上になつてよ。．．．できるだろ？」

「い．．い．．いいから、わかったから．．．．．早く．．．．．ちようだ．．いつ／／／」

「おいで、紘．．．．」

最早力のほとんど入らない紘を支えて、俺の腰に跨^{またが}らせる。

「あああ・・・っ・・・ふあっ」

少しずつ腰を落とさせてやると、その度に紘の声が艶^{つや}やかになっていく。

「お前・・・エロいなあ・・・中、やばいぞ・・・?」

「い・・・言わな・・・いで・・・っあう・・・」

最後まで入ると、紘はぐったりして俺にもたれかかってきた。

自分の体重で俺のモノが深くに当たるんだろっ、呼吸をする度に紘は体を震わせる。

「ほら・・・休んでる暇、ないよ？ 自分で動いて。
俺は動けないぞ・・・？ お前が乗ってるから。ふふっ・・・」

軽く体をゆすつてやると、紘は恍惚とした貌かおでしがみついてくる。

「ああ・・・無理いつ・・・動けな・・・」

「じゃあ、ずっとこのままか・・・？ 俺も、そろそろキツイんだけどな・・・」

「・・・遠がつ・・・動けば・・・いいじゃな・・・い・・・」

「だから、俺はお前が重くて動けないの・・・わかる？
紘・・・イきたくないのか・・・？」

「イきたいっ！・・・イきたいよお・・・っ」

「じゃあ、きちんと動かないと・・・ね。自分で、できるだろう・・・」

・
「？」

「ああ……………もう……………」

紘は、観念したように動き始めた。

最初はぎこちなく……………だが、次第に激しくなっていく……………
た……………

25話（後書き）

なんか、中途半端な場面で終わってしまいました。

本当は、Hなシーンは1話で終わらせるつもりだったのですが。

本当に不定期な更新になってしまいましたが・・・悪しからず。

それでは、また次話でお会いしましょう♪

26話

正直、紘がこんなに乱れるのは初めてだ。

俺とに限れば、これが最初で最後。

それが悲しくて、紘の体に没頭していたのに、いつの間にか俺の瞳からは涙が流れていた。

「・・・っ！・・・遠・・・？　ど・・・した・・・の・・・あぁ
っ・・・はう・・・」

「え？」

「りよ・・・う、何・・・で、っはぁ・・・泣いてる・・・の？」

「あれ・・・何でだろ・・・」

ああ！こんなに紘が感じてくれたの初めてだから、感動しちったんだよっ・・・ははっ

「な．．に、それ．．ふふっ．．んあ．．．いつだって．．
感じてるよ．．．やだあ．．こんなこ、と言わ．．ああっ．．
言わせる、なんて．．」

無意識に泣いてしまっていたことが恥ずかしくて、俺は咄嗟に嘘をついた。

それに、本当の理由なんて知ったって紘が悲しむだけだ。

紘にだけは。紘にだけは、俺との思い出を幸せなモノにして欲しい。俺には何も残らないから。

．．．．．どうせ、記憶も消すんだけど。っていうか、ホントに消えんのか？

催眠術って、ホントにあてになるんだろうか？

「遼．．．．？っ．．．キモチ、良くない．．？」

「そんなことないよ．．．逆だよ．．．気持ち良過ぎて。ボツとしてた。」

「ごめん、ビックリしたか．．．？」

「う．．ん。はあ．．．あつ．．．何にも、言わないか．．．ら、どした．．んだろ．．．て．．．ふうっ」

「ごめんな．．．ああ、紘、いい子だったな。もういいよ？俺が後は、やってやるよ。」

「．．．うんっ！．．．も．．．我慢できないい．．．っから」

「紘はエロいなあ。」

「遼だつて．．．」

「俺のどこがエロいつて？言ってみろよ。絶対、お前の方がエロいよ。」

ちよつと苛^{いじ}めてやろうと言葉にトゲを入れると、紘は潤んだ目で精一杯睨みつけてくる。

そんな紘が可愛くて、益々いじめたくなってしまう。

「……遼のいじわる……」

「そんなの、分かりきった事だろ？」

「………なんで、開き直っちゃってんの……？」

「だって、紘はどんな俺でも……好きになつてくれるもんな？」

「……ふうつ……そ……そんなこと、わかんない、じゃない・
……」

「そお……？紘は俺のこと、嫌いになれるか？」

焦^じらすようにほんの少し突き上げてやると、紘は快楽に顔を歪^いませる。

「ああ……っん……もし……なったらどうする……の？」

「どうしようかなあ………」

紘の感じるポイントを掠^{かす}めたりして苛^{いじ}めてやる。

「『可愛さ余って憎さ百倍』みたいな感じになっちゃうかもよ？」

「．．え．．．．何、それ．．．ああ．．ん．．．．」

「紘が俺から離れちゃったら、紘のこと刺しちゃうかも。俺。」

「そんな．．．人殺しだよ．．？それ．．．．っ．．」

「紘の事のなら、人殺しになれるよ？」

「．．．．．嫌あ．．．」

「ん？」

「だめだよ．．．私の為になんて．．．．．ダメだよ．．．．」

「．．．．．」

ああ．．．ヤベエ。

何で紘はこんなに俺の心を掴むのが上手なんだ……

「紘……自分の言ってること、わかってる？」

「……うは……っ……？」

「自分を殺すって言ってる人間のこと庇ってるんだぞ？」

「だっ……て、遼だったら……いい、もん……」

瞬間、紘の膣内^{なか}がキュッと締まる。

締め付けられて、俺は理性が飛んだ。。

今までののは何だったのかってくらい、夢中になって紘の中を突き上げ、貪^{むさぼ}った。

「あぁっ・・・・・・・・つりよ、遼・・・・・・・・！ふう・・・・・・・・っ・・・・・・・・あぁあ
・・・・・・・・」

「絃・・・・・・・・好きだ・・・・・・・・好きだ、絃・・・・・・・・っはぁ・・・・・・・・」

「遼・・・・・・・・っ？・・・・・・・・私も・・・・・・・・好き、だよ・・・・・・・・・・・・・・・・大
好き・・・・・・・・あうっ・・・・・・・・あぁ・・・・・・・・んっ・・・・・・・・」

交わっている部分がグチュグチュといやらしい音を立てる。

俺は絃と一つになれる証であるこの音が、結構好きだ。
絃はどうか知らないけど。

わざと大きな音が立つように動いてやると、絃の喘あえぎがツヤを増す。
感じてるんだ。

「イきたいか・・・？はあっ・・・紘・・・」

「いき・・・たい・・・っ！イかせ・・・あぁっん・・・っう・・・」

「ナマで出してもいい？」

「・・・んっ・・・へい、き・・・まだ・・・」

「サンキュ」

「・・・・・・？・・・あああう・・・・・・っ・・・やあっ・・・」

中出しも最後・・・ははっ・・・・・・

紘・・・・・・好きだよ・・・愛してる・・・忘れないで
くれよ・・・・・・

「ああああっ………遼うつ………も、いつちやう………
！もつと………も、とちよ………だいい………っ！！」

「っはあ………紘………もう、伊っていい………もう………う
っ………苛めない、から………」

「い、あああああ………！！！」

「ううつ………ああっ………」

一際奥まで突いた瞬間、紘の胎内が激しい収縮を起こした。

それに促されるように、俺も絃の中で盛大にいった。

・ 絃の絶頂も俺の射精も・・・・・・・・今までで一番長かったんだ・・・・

「ああ・・・・・・・・遼・・・・・・・・す、き・・・・・・・・」

精魂尽き果てた紘は、俺が返事を返す間も無く意識を手放してしま
った。

待つてくれよ……おい……

俺だって、最後にきちんと言いたかったのに……

約束の時間は、すぐそこまで来ているんだから

27話

ああ。寝ちゃったよ……

でも、これできっと準備できるまで寝ていてくれるはず。

さあ、準備をしよう。

誰も、絃でさえ知らない俺の趣味。
それは、催眠術や読心術、洗脳など……他人の精神に干渉すること。

別にオカルト趣味ではないが、一時期ハマっていた裏サイトで見つけた方法。

信じてなんかいなかったけど、面白半分で友達に試してみたら、あ
っけなくかった。

紘にも何度が試したことがある。

もちろんSexの時。ちょっと淫らになるように暗示をかけたら・
・効きすぎてちよつと困った。

誰も、操作されたことに気付いたことがない。

記憶がさっぱり抜けてるらしい。

俺には、元々そういう才能が備わっていたのかな？

でも、やるのは久しぶりだし、今回は前と違ってお遊びじゃない。
一回きりのチャンスだ。

紘に気付かれたが最後、紘は俺に心を許そうとはしなくなるだろう。

大丈夫だろうか……

深呼吸をして、精神を落ち着かせる。

眠っている紘をじっと見ながら、神経を研ぎ澄ます。

ふう………

さあ、時間だ。

『紘、起きろ。』

いつもとは違う、催眠術の使用時独特の声に切り替えて、紘に呼びかける。

目を開けた紘はしかし、その瞳に何も写さない。

催眠術をかけて成功した時の湧き上がるような感情は好きだが、この、相手の虚ろな瞳を見るのは辛い。

自分が他人の精神に踏み込んでいることを、嫌でも思い知らされる。

『紘、お前の幼馴染の名前は、何て言う？』

「・・・遼。戸島、遼。」

『それは違うだろう。紘の幼馴染は、戸島、泰紘^{やすひろ}だ。』

「違うよ・・・遼、だよ・・・」

『泰紘だ。忘れたのか？・・・遼なんて言う人間は、いないぞ。』

「・・・遼だよ・・・」

「・・・くそ・・・今回は手強い。」

催眠術の成功・失敗は、術をかける者とかけられる者の、精神の強さの勝敗にかかっている。

紘が俺を想う強さはハンパ無い。
本来なら嬉しい想いだが、今はとんでもなく邪魔なものだ。

……でも、俺も引くわけにはいかない。

根気良く、記憶の塗り替えを促す。
つなが

『お前の幼馴染は、泰紘だよ。泰紘が、可哀想だぞ?』

「……………」

『泰紘はお前の事が好きでしょうがないのになぁ。お前、泰紘と付き合ってたの忘れたのか?』

「……私の……好きなのは、付き合ってたのは……………」

『泰紘だよな？ それとも他に、お前が好きになったヤツでもいるのか？……いないよな。』

「……好きなのは……………泰、紘……………？ 遼、は……………」

『遼、なんていつ、何処にいたんだ？ お前の側にずっといたのは……………ずつといるのは、泰紘だ。』

「泰紘……………遼、は……………いない……………？」

『思い出したか？ 幼稚園の頃から一緒にいて、たった一人好きになったのが、泰紘だ。』

「私の、好きな人は……………戸島、泰紘。」

『泰紘のことを、思い出したか？』

「……………思い出し……………た。私の、私の最愛の人……………泰紘……………」

『……………遼ってヤツ、聞いた事あるか……………？』

「……………？ 誰……………だっけ……………聞いた事が……………」

『聞いた事、なんて、無いだろ？ 嘘、つくなよ。遼なんて、いないんだ。』

お前の心を占めるのは、泰紘だけだ。これから先も、お前の想う相手は泰紘だけ。』

「泰紘・・・会い・・・たい・・・。」

『そんなに焦なくても、目が覚めたら、お前の横には泰紘が寝てるよ。今日、泰紘とお前がしたことは覚えてるのか？』

「覚え・・・てる。セックス・・・した・・・の・・・。」

『優しくったか・・・？』

「うう・・・ん？ ちょっと、意地悪・・・された・・・。」

『そうなのか。じゃあ、起きたら、文句言ってやんなきゃな。』

「うん。・・・優しく、して・・・もらわなくちゃ・・・。」

「

『そうだな。・・・泰紘のこと、好きか？』

「・・・大好き。とっても、好き・・・。」

『・・・そっか。泰紘は、幸せだな。じゃあ、そろそろ俺は行くけど、お前は起きるか？』

「・・・ううん・・・もう少し、寝ていたい・・・眠く・・・て・・・

「・・・」

『ああ、寝てていいよ。・・・でも、聞きたいことがあるんだ。いいか?』

「・・・なあに・・・?もう、眠いの・・・」

『遼つて名前のヤツ、知ってる?』

「・・・?・・・だあれ、それ・・・?あなたの、友達・・・?」

『いや?・・・知らないなら、いいんだ。ごめんな。』

「うつん・・・もう、寝て、いい・・・?」

『ああ、いいよ。・・・じゃあな?』

ついでにだけど。お前は、今この場であつた事はキレイに忘れる。いいな?』

「・・・ね、ちょっと・・・」

『ん?』

「あなたの、名前は・・・?何で、私のこと、知ってる・・・の?」

『・・・俺の名前は・・・リヨウだ。お前が死ぬまで・・・お前を、見守ってるから・・・』

「・・・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・忘れる・・・・・・・・考えるな。いいから、もう、寝ろ・・・・・・・・」

半ば無理矢理紘を眠らせ、俺は脱力した。

成功、だ。

これで・・・・・・・・明日になったら、紘は俺のことを忘れる。

自分で自分の存在を否定し続けるのはすっげえ苦しかったけど・・・
・全て、終わった。終わったんだ。

いつでも逝ける。

思い残したことも・・・ない・・・わけないけど、仕方ねえ
もんな・・・

せめて今日だけ・・・

最後に、お前を抱いて眠らせてくれ・・・紘。

いつ消えるかはわかんないけど、遼として生きるのは、今日を最
後にするから。

明日からは、消えるまで泰紘として生きていくから。

疲れた・・・

他人の心に干渉するのって、本当に疲れるんだよね・・・

じゃあな、紘……

さよなら。ずっと、愛してる。

ああ、眠い……

28話

目を開けると、大切な人――
うな寝息を立てて眠っていた。
泰紘やすひろが気持ちの良さそ

「泰紘・・・・・・・・」

でも、なんだろう・・・？

何か・・・変？何かわからないけど、
・・・
何かわからないけど・・・

まあ、いいか。

そう考えて、泰紘に体を摺り寄せてもう一度寝ようとしたら。
泰紘が起きた。

「ふああ……………あ、^{ひろ}紡。起きてたの。」

「うん。おはよう。」

「ああ……………って、おいつ。今何時だよ。」

「え？……………んつと、5時40分過ぎ。」

「やべつ。もう戻んねえと。じゃな。」

「あ、ねえつ。」

「あんだよ？もうお袋達起きちまうだろ。」

「今日も……………来るよね？」

「……………お前が来て欲しいなら。」

「来て。お願い。」

「……………おい、頼み事する時は……………名前呼べよ……………」

「なあに、それ。」

「いいから……………呼んでみる。」

「いいけど・・・？どうしたの、泰紘。いきなり・・・？」

私が「泰紘」と名前を呼んだ瞬間、彼の顔が一瞬^{かげ}翳ったのがわかった。

どうかしたんだろうか。

「・・・いや。なんでもない。・・・じゃあ、俺帰るわ。」

「うん。また今夜ね！」

「はいはい・・・」

「何それっ。」

「ははっ。じゃあな。」

「バイバイ。」

泰紘は、私の部屋を出て行く時も、さつき私が名前を呼んだ時と同じ様な・・・何かを堪^{こた}えるような表情^{かお}をした。

その表情を見て、私もなぜかチリツと痛みを感じた・・・・・・・・のは、気のせいだろうか。

気のせいだろう。

そう決め付けた私は、再び何も考えることなく眠りについた。

再び6：30に起きた私はしかし、なんとなくモヤモヤとした気持ちを抱えていた。

そんな気持ちを吹っ切ろうと今日やるべきことを思い返してみたのだが・・・・・・・・

何もする事ない・・・・・・・・

折角だから、泰紘を誘ってショッピングにでも行こうか。

泰紘は嫌がらないんだよね。．．．．．泰紘は．．．？
じゃあ、誰が嫌がったんだっけ．．．？

うゝん．．．思い出せない。

ま、いいや。とつと泰紘を誘って出掛けよう。

まるで何かに邪魔されでもしたかのように、私は度々感じる違和感について長く考えていられなかった。

そう。この時、私の頭からは遼のことは全て消え去っていた。
一辺たりとも残らずに。

家に帰ってきてベッドに潜り込んだものの、俺は眠る気になれなかった。

俺を・・・いや。泰紘を呼んだ時の、あの目。

なんで・・・・・・・・なんで、俺だけがこんな目に遭わないといけねえんだ・・・・・・・・

本当は、紘にもこの痛みを分かち合ってほしい。

紘に、俺の名前を呼んでほしい。

俺の名前だけを、呼んでほしいのに。

自分で下した決断だけど、今になって後悔の念が募る。

うわぁ・・・今、俺めちやくちや女々しい。

自分で自分が嫌んなる。

でも・・・泰紘も、今まで俺と同じ思いをしてきたんだよな。

あいつは、耐えた。

最後の最後まで、ホントに耐えられなくなるまで、紘にも俺にも文句の一つも言わず、耐えた。

あいつにそれができて、何で俺にできない？

そんなワケないじゃないか。

・・・俺はアイツで、アイツは俺なんだから。

すう・・・・・・・・・・はああ・・・・・・・・・・

どんなときでも、深呼吸は人を落ち着けてくれる。

体の仕組みって、よくできてるよな。

よしっ。

もう一寝入りしてスッキリしよう。

そう考えた数秒後の記憶は、無い。

29話

私が、事あることに泰紘に妙な違和感を抱くようになって2週間弱。

とうとう合格発表の日がやってきた。

発表は正午。

私は今日、なんと5：30に起きた。
何の意味もないけど。

お母さんにも、「緊張してるのね・・・大丈夫よ！紘は受かってる！」なんて励まされて。

でも、まあ、勇気付けてくれるんだからいい母親だ。

「・・・でもさ・・・受かってなかったら、どうしようね？　ね、どーしょ。ああ・・・お母さん、心配になってきちゃった！」
なんて爆弾を最後落としてくれたとしても。

お母さんには発表には来ないように言って、私は泰紘を呼び出した。
一緒に昼食をとって、少しでもリラックスしてから見に行こうという算段だ。

「ええ・・・お母さんと一緒にご飯食べないの？　なんで見に行っちゃいけないの？　ねえ、紘お。」

・・・とわが母上は泣き落としにかかったが。
そんなものに私がかかるわけがない。

「今日は泰紘と見に行くの！　帰りもちよっと遅くなるかしんないけど、心配しないでね。」

一刀両断。

母上も黙ってしまわれた。　　うふふ。

「うー・・・とにかく、気をつけるのよ。」

「はい。じゃあ、行ってきます!!」

今日は私の、ううん、私達の運命が決まる日!

服装良し!お化粧良し!髪もバツチリ♪

いざ戦場へ!なんちゃって

今日は本当に落ち着かないなあ・・・ははっ

家の前で、もう泰紘が待っていた。

「泰紘おお!!」

「紘・・・!？」

名前を呼びながら抱きつく、泰紘がビックリした。
もつとびっくりさせたくて、泰紘にディープキスをかましてやった。

ふっふっふ

今日の私は、怖いもの無しだ！

「んっ・・・おいっ・・・紘。どうしたんだ？」

「んっ？なんだろうね、なんか舞い上がったちゃってさあ。」

「ああ・・・お前、緊張してんのか。」

「・・・え？」

「お前、緊張すると極端に無口になるか、饒舌じょうぜつになるか、どっちかだろ。」

「そ、そっだっけ・・・？」

なんか、泰紘に自分の事指摘されると照れる・・・なあ／＼

「まあ、俺も緊張してるし？いいから行こうぜ。
レストランも混みはじめるよ。」

「え？泰紘も緊張してんの？・・・見えな～い。」

「失礼なやつだな、お前。人生が決まる日だぞ？緊張しないわけあるかよ。・・・ったく」

「はいはい、わかってるよ！もうっ」

「はい、は一回ってお袋さんから教わらなかったか？ベイベちゃん？」

「~~~~っ泰紘なんて嫌いになっちゃうからね！そんな事言ってる。」

「ほお。なれるもんならなってみろつての。」

「どーせなれませんか！泰紘だって、そうじゃないと困るくせにい。」

「絶対嫌われない自信あるから、俺は大丈夫なの。」

「・・・ナルシ・・・」

「なんか言ったか？」

そんな他愛ない痴話げんかを楽しみながら、私達はファミレスに入った。

メニューを決める間も、食べてる間も楽しくおしゃべりしていたら、あっという間に時間が経ってしまった。

「おい、紘。そろそろ行くか？もうすぐ時間だろ。」

「うん・・・ねえ、泰紘。もし二人とも受かってたらさ・・・」

「何？」

「これから毎日しよう（・・・）ねー！」

「・・・今だつてしてんだろ・・・って言うか、ここファミレスだぞ？場所弁^{わきま}えろよ・・・」

「うう～～・・・いいの！とにかくご褒美決めとくの！」

「はあ、褒美、ねえ・・・お前、千足屋のフルーツパフェ、好きだったろ。」

「うん。」

「良しつ。二人とも受かってたら、デパートに食べに行こうぜ！俺のおごりだ！」

「いいの！？？」

「だって、あそこ高いよ・・・？」

「金は持つてきてるから。」

「わあ・・・！ホントっ！？やったあ！」

「おい・・・あくまでも、受かってたら、だからな？」

「泰紘は、受かんないって思ってたんの？」

「いや？そんな事あるかよ。一応、確認だよ。」

受かってたらパフェ♪

受かったたら泰紘と毎日・・・／／／！

受かってますよーに！！！

ファミレスを出て（コレはきちんと割り勘w）、さあ、発表会場に
出発だ！

30話

何度見ても、この大学は広い。

この広さにも憧れていた。

でも、広大なその敷地に圧倒されてもいた。

なんだか、孤独な感じがして……

ね、泰紘。

受かっても受からなくても、もし……もし受からなくても、ずっと一緒にいてくれるよね？

私を、独りにしないで。

なぜかわからないけど、いつからこんなに怖くなったんだかわからないけど、独りになるのがとても怖い。

まるで……前に誰かに置いていかれたことがあるような……

そんな感じがして。

遺^{のこ}されたくない、って思うの。

何なんだろう、この気持ち……

「紘？どした？」

「え……？あつ。うん……」

「おい。大丈夫か？気分悪いなら、どこかで休むか？」

「ううん……ううん、ごめんつ。何でもないよ。」

「そうか？具合悪くなったら、すぐに言えよ？」

「うん。ありがとね。」

ああ、掲示板が見えてきた。

お願い、神様。

私も泰紘も、受からせてください。

私は彼と一緒にいたい。引き離さないで。

お願いします………

「とうとう着いたな。」

「うん……」

「じゃあ、探すぞ。」

「うん……」

泰紘の4116番を先に見つけた。

……よかったあ。

私は・・・？

8748番はどこ？

8700 / 8705 / 8722 / 8734 / 8736 / 8739 ,
8741 / 8743 8748 . . .

8748!!

あつた！私、受かった！

「紘っ！」

「泰紘っ！！受かったよっっ！」

「ああ、受かったな！」

「良かったあ・・・良かったよお・・・」

「ああ・・・ああ・・・」

見ると、泰紘の鼻が赤い。

「泰紘……？もしかして、泣いてるの？」

「ばっ……コレのどこが泣いてる顔なんだよっ」

「だって、鼻赤あい。」

「お前はどつなんだよ。もろ涙出ててさ。」

「これはね、嬉し涙だよ！」

「……正直だな、お前。」

「うんっ」

泰紘も涙で顔を歪ませると、私をしっかりと抱きしめてくれた。

その温もりが心地よくて……歪んだ表情かおにふと覚えた既視きし感も、心にほんのちよつとのつめ跡を残したに過ぎなかった。

他の受験生は、こんな私達を見てどう思うだろうか。

他人の目が少し怖くて、泰紘の腕から抜けようとすると、泰紘はなぜかそれを許してくれない。

「ね、泰紘・・・？他の人、見てるでしょ？恥ずかしいから離して・・・」

「・・・・・・・・・・」

「泰紘？・・・どうかした？」

「・・・・・・・・・・」

「ねえ、泰紘。ねえったら。」

一向に動こうとしない泰紘に困っていると、肩にヒンヤリとした冷たさを感じた。

え・・・・・・・・

泰紘、泣いてる……？

「泰紘……端っこ行こう？　このままでいいから、ゆっくり動くよ？」

コク、と額が揺れるのを確認して、私は泰紘を抱えるようにして近くの花壇まで連れて行き、腰掛けさせた。

泰紘がこんな風に私に体を委ね^{ゆた}るので、初めてじゃないかな……

どうしたんだろう……

色んな人がこっちを見ていて恥ずかしかったけど、泰紘の異常さにそれどころではなかった。

「泰紘？」

「う……………」

「ねえ、泰紘……………」

「……………」

「……………」

無言で頷く泰紘。

背中をさすってあげると、深呼吸しているのか、鎖骨に泰紘の吐息を感じる。

それさえも私には刺激になってしまって……………そんな事感じている場合じゃないのに。

感じて……………きてしまった。

どうしよう。

泰紘の息がかすかにかかる度に、呼吸が震えてしまう。

泰紘にはばれない様にしないと……っはあ……

「ね、泰紘……お願い、もう……」

「……………う……」

吐息が弱い部分に当たって、ピクツと身体が反応からだしてしまう。

バレる……っ

「ひろ………?」

泣き腫らした目で、泰紘が訝^{いぶか}しそつに見上げてきた。

「あつ・・・ね、ねえ、もう大丈夫・・・？」

「・・・・・・・・ん」

「じゃあ、トイレでも顔洗って、そろそろ行かない？」

「ん・・・・・・・・」

ほとんど無理矢理に泰紘を立たせ、トイレのある方へ引つ張っていく。

顔を見られないように、俯^{うつむ}きながら・・・・・・・・

無事にトイレまでたどり着くと、私は泰紘を男子トイレに押し込み、自分も脱兎^{だつと}のごとく女子トイレに駆け込んだ。

身体の火照りを何とかして鎮^{しず}めるために。

5分以上経ってようやくトイレから出ると、泰紘がもう待っていた。

「や、泰紘。もう、大丈夫？」

「あ、ああ。・・・ごめん。」

「何謝ってんの？泣きたい時は泣くのが一番だよ！」

「ありがと・・・ホントにごめん。」

「???・・・まあ、いいや。手続きして、帰ろ？」

「ああ。」

手続きに手間取ってしまい、家路につくのが思ったより遅くなってしまった。

「あ、そういえば。」

「何よお。」

「キツかっただろ・・・あんなに長い時間。」

「・・・・・・・・」

「ごめんな。俺、自分の事で一杯一杯で・・・」

「つ・・・いいよ、そんな事。気にしないでよ・・・」

「・・・・・・・・何なら、今からデキる（・・・・）とこ、行くか？」

「・・・・・・・・え・・・？」

「お袋さんには、遅くなっても大丈夫なように言ってるんだろ？
少しくらい、俺も平気だし・・・」

「・・・え？何言ってるの？・・・どういう事・・・？」

「もちろん、夜も来て欲しいなら行くよ。」

「いや、ちよつ、ちよつと待って。何でそついう事になるの？」

「お前、体、ヤバイだろ。今。」

「・・・・・・・・!!」

「見りゃわかんだよ。俺は・・・」

「・・・・・・・・」

「ごめん、辛いだろ。」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

「行こう。」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

泰紘には、結局何でも気付かれちゃうんだよね・・・・・・・・

でも、確かにもう、結構ヤバかった。
夜まで待てるか不安だったから・・・・・・・・気付いてくれて、本当に
良かった・・・・

・・・・・・・・でも、できる所って、何処だろ・・・？

不思議に思ってたなら、泰紘が見透かしたように笑った。

「ああ、俺の部屋だよ。」

「・・・え！？だってお母さんいるでしょ？」

「ああ、平気。最近、鍵ついたんだよ。」

「そういう問題・・・？」

「そういう問題。」

「ホントに、いいの？大丈夫？バレない？」

「平気。心配すんなって。」

ただ今16時。

冬だから、一応、もう夜・・・なのかなあ。

だって、昼間っから・・・っていうのも、ねえ。

30話（後書き）

お久しぶりです。

ちよっといつもより長めでした。

疲れた方とかいらっしやったら、すみません＞＜

では・・・

31話

なんだかんだ言って、泰紘はやさしい。

俺が寄っかかったただけで感じるのかよ、とか、エロいなあ、とか。恥ずかしくなっちゃう事をイヤってほど連発しておきながら、する時はすごく優しいんだよね。

何考えてんだろ。まったく。

結局私はあれから4回イカされて、そのまま疲れて寝てしまった。

泰紘が、お母さんに電話しておいてくれたみたい。

携帯に手を伸ばすと、メール着信の文字。
お母さんからだ。

「おめでとう！！晩御飯はとんかつだよ、なるべく早く帰っといで。」
「だって。」

さすがお母さん！わかってる！

おめでたい日の夕飯は、いつも私の大好物。とんかつ!!

っていうか、私は肉なら何でもいいんだけどね。

肉食女子ですよ。

肉力モン!

魚なんてあんなヘルシーそうなもの! ヘルシーすぎて、食べた気になんないっての。

やっぱり、肉だよ! 肉!!

・・・つと。

そんな事考えてる場合じゃなくて。

この状態は。。

何で、泰紘が真っ裸で私に抱きついてんの・・・?
寝てるし。

私が寝る直前、服着てた気がするんだけど?

うゝん・・・

これは起こしていいんだろうか。

でも、私も早く帰ってとんかつ食べたい。

だって、もう7時過ぎてるんだよ。

「泰紘。ねえ、起きて。」

・・・寝。

「ねえ、ちよっと！起きてってばっ！」

・・・爆睡。

「泰紘！！起きてよ！私が起きられないでしょっ！・・・・・・も
う・・・・どーしよ。」

怒鳴っても叩いても、何をしても起きてくれない。

声を出すのも億劫おっくうになってしまつて、私は泰紘を起こすのを諦めた。

もう、どうとでもなれ。

もしとんかつ食べはぐったら、その時は覚えてろよ・・・・・・

なんて女の子らしくない暴言を心の中で吐いちゃいました。
キャッ／＼／

でも・・・早く起きてよ・・・

紘と寝てから、体がおかしい・・・

何とか紘のお袋さんには電話したけど・・・熱い。

体が、熱い。

脱いでも大丈夫かなあ。

って、どうせ紘寝てんだし？別にいつも見てるし？

服を脱ぐと、いくらか熱^{ほて}りが鎮まった気もしなくはない。

眠っている紘の体に触れると、外気に当たった素肌がひんやりして
いて更に気持ちいい。

もう名前を呼んではもらえないけど・・・遼として紘に触れられる時間があるのが、今はすごくうれしい。

でも・・・やたら眠い。

紘が寝た直後から、眠いわ体は熱いわ・・・一体何なんだ？

このまま寝ても・・・いいか？

寝るんだったら、紘を抱いててもいいかな・・・

ねみい・・・寝よ・・・

意識が落ちる直前、「だめだ・・・！」と聞き慣れた声がした・・・気がした。

気がつくと、薄暗い、何も無い場所にいた。

見慣れた空間―――事故後に俺がいた所だ。

．．．．．ということは、時間が来たんだな。

最期に、泰紘と会えるか．．．？

「おお～～～い！泰紘お！出てこらんないか！？」

声を張り上げて呼んでみるものの、何の返事も無い。

やっぱりダメか．．．．．

そう思った瞬間。

「遼．．．．．」

背後から、押し殺した声が聞こえた。

驚いて振り向くと、俯いた泰紘がきまり悪そうに立っていた。

「あ．．．泰紘。」

「遼．．．もう、時間なんだな？」

「ああ．．．。そうみたいだな．．．．俺が思ってたより、結構持ったな。」

「なんで、そーゆー事言うんだよ？」

「なんで．．．？」

「お前が望めば．．．もつと生きられたかもしれないのに！」

「寿命だからなあ．．．誰にも変えられないだろ。」

「．．．っ．．．俺は、これからどうすればいい？」

「おい．．．俺は、紘の前ではお前を演じてきたんだ。お前は、そのままでいい。」

「でも．．．」

「大丈夫だ。心配ない．．．俺は最後まで、失敗しちったけど。」

「失敗・・・？」

「合格発表の時だよ。泣くつもりなんて無かったのに・・・・・・・・紘とお前がうらやましくて・・・・・・堪えらんなかった。」

「ああ・・・・・・・・」

「お前、見てたんか？」

「ああ。なんか、お前と入れ替わってもらってから、見えるようになった。」

「そっか。」

「・・・・・・・・ああ、そうだ。多分だけど、俺ができたもんはお前もできるはずだ。言ってる意味、わかるよな？」

「洗脳のこと？」

「ああ。もし、紘が何かのはずみで思い出しそうになったら、お前が忘れさせてやって。」

「・・・・・・・・本当に、忘れられたままでいいのかよ。」

「・・・・・・・それが、最善だ。」

「違ーよ！俺が言ってるのは、お前はそれでいいのかって聞いてんだよー！」

「今から死ぬやつの事なんて、気にしてんじゃねーよ。」

お前は自分のことだけ考えとけ。バカ。」

「バカって何だよっ。」

泰紘と話してたら、急に、体が熱くなってきた。

熱い……もう、時間だな……

「あっつ……」

「遼？」

「わりい……もう時間みたいだ。……そろそろ、お前は起きろ。」

「最期くらい、見届けてやるよ……」

「いいよ、恩着せがましい。」

「いいじゃんか……」

「どうなっちまうのかわかんねえのに、見られたくないんだよ……」

「……わかったよ。」

「紘を、頼むよ。」

「・・・・・・・・ああ。任せて。」

「ありがとな、最期まで・・・・・・・・っ・・・・もう、行け。」

熱い・・・・・・・・熱い!!

「遼・・・・・・・・」

「行けっ！」

「・・・・・・・・お前の人生、ありがたくもらっとくよ。俺が死んだら、迎えに来てくれよ？」

「まったく・・・・・・・・紘を置いてこっちに来たら、承知しないかな。
・・早く、行け・・・・・・・・」

「ああ・・・・・・・・・・じゃあな・・・・・・・・」

「バイ・・・・・・・・」

来た時と同じようにフッと泰紘がいなくなる。

はぁ．．．．．あつちい．．．もういいんだから、こんな目に遭わ
せんよ．．．．．神様。

紘．．．．愛してる。
泰紘も、好きだ。

でも、もう一緒にはいられない．．．．．っう．．．．

自分独りしかない空間が、泣いていいよ、って言ってくれてるみ
たいに思えて．．．．．俺は思いっきり泣いた。

人生、最初で最期の大泣き。

あああああああ．．．．．っ！！

どのくらい泣いてたかわかんないくらい泣いたら、また急に眠くなってきた……

もう、終わりだ……

闇に落ちる前に、フツと外の様子が見えた。
泰紘が起きて、紘に怒られてる……

そうだ、それでいい……

紘……愛してる……さよなら。

32話

「・・・う・・・っ」

「泰紘？」

「あ・・・紘。」

「もう！いつまで寝てるつもりだったの！？」

「あ、ああ・・・ごめん。」

「まったく・・・私、もう帰らないと。お母さんが、とんかつ用意してくれてるんだ」

「そうなんか。じゃあ、早く帰らないとな。」

「・・・って、ああ、わり。俺の所為で起きらんなかったんか。」

「そうだよ。まったくもう！ほら、早くどいて。」

「はいはい・・・」

服を着たまま寝てたせいでグチャグチャになった惨状たふさつじょうを見て、紘が怒っていたが、俺の耳には何処か遠くからの声のようにしか聞こえていなかった。

心ここにあらずという状態でなんとか紘を送り出すと、どっと疲れが押し寄せてきて、夕飯も食わず、風呂も入らないままベッドに倒れこんだ。

「泰紘――！？ご飯、用意できてるわよ？食べないの？」

かすかに母さんの声が聞こえるが、答える気力さえ無かった。

「・・・泰紘？あんたの好きな唐揚げよお？」

ガチャツと音がしてドアが開くと同時に、母さんが顔を出す。

「ごめん・・・今、いらない・・・」

「・・・泰紘？もしかして、紘ちゃんとかあった？」

「違う・・・違うんだ・・・」

「どうしたの？お母さんに話せない？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そういえば、俺も遼も、母さんには反抗したことがほとんどない気がする。

だからっていつて、外で大暴れしてるわけでもないし。

こんな男子なんて、中々いないんじゃないか。

話しても、いいんだろうか・・・？

俺と遼の、両方の、母さんだし・・・・・・・・

「聞きたい・・・？」

「聞いてもいいことなら。」

「信じる?」

「・・・?・・・信じるよ?」

「・・・・・・遼が・・・」

「!・・・遼!?・・・何で・・・」

「遼が、さっき・・・逝^いった。」

「え・・・」

「遼が、ついさっき死んだ。」

「・・・・・・」

「やっぱり、信じらないよな。」

「・・・何で、そんなこと、わかるの・・・?」

「俺の中にずっといたから・・・っていうか、俺が勝手に乗っ取ったみたいな感じだけどさ。」

「遼は、ずっといたの・・・?」

「いたよ、母さん。・・・俺達が目え覚めてからのハナシ、聞いた?」

「・・・・・・・・ええ。」

「長くなるよ。」

「うん。・・・・・・・・あつ、お父さんも下で待つてるんだ。・・・・・・・・ご飯食べなくてもいいから、一緒に下に来てくれない？・・・・・・・・お父さんも、聞きたいと思うのよ。」

「・・・・・・・・いいよ。」

疲れた体を引きずって、母さんと一緒にダイニングに下りていくと、合格の知らせを母さんから聞いてたのであろう父さんがニコニコしながら待っていた。

しかし・・・・・・・・俺達の、嬉しそうにはとても見えない表情を見て、父さんの表情も怪訝けげんなものに変わった。

「どうしたんだ？お前達・・・・・・・・」

「お父さん、泰紘が、話す事があるんだって。」

「ん・・・・？何かやらかしたんじゃないだろうな？」

「違うわよ。・・・・・・・・遼の、事よ・・・・」

「は……？」

「泰紘……話して。」

「あ、ああ……。」

俺は、何もかも、俺が話せることは包み隠さず話した。

さすがに俺と遼の感情についてまでは事細かには話さなかったが、事実として話せることは全て、話した。

……洗脳のこと。

母さんは、信じると言った手前、遼の名前を突然出した最初ほど驚いた様子は見せなかった。

父さんは……何と言うか、呆然とはこの事を言うんだな、という表情で僕の顔をポカンと見つめるばかり。

正直、父さんの間抜け面を見るハメになるとは思いもしなかった。

やっぱり、いざって時には女の方が強いんだなあ、と思ってしまった。

「じゃあ、この事、紘ちゃんは覚えてないの……？」

「ああ。遼が、忘れさせちったんだよ。」

「遼も可哀想だけど……紘ちゃんも可哀想だわ。」

「うん……そうだよ……。でも、遼が、その方がいいって……」

「どっちにしても可哀想だわ……。でも、あなたは大丈夫？」

「え……？」

不意打ちだ。

まさか、俺に話がふられるとは思わなかった。

「泰紘は、大丈夫なの？無理してない？」

「そうだ。今生きてるのは、お前なんだぞ。泰紘。」

ああ、俺のことを、息子だと思ってくれてる。

初めて、心からそう思えた。

いつも、俺の名前を呼んでいても他の誰か——遼を探して
いるのがわかっていた。

遼の存在を知らなかった時は、どれほど不安になったか知れない。

遼を知って初めて、しかたないと思えるようになった。

諦めた。^{あきら}

でも、今は。

俺が、2人の子供なんだ。

遼には悪いけど、本当に嬉しかった。

「ん、大丈夫……」

言いながら、涙が止まらなかった。

「辛いのは、泰紘も一緒ね……。全部分かっている分、あなたが一番辛いかもしれないわね……」

「大丈夫……。大丈夫、だから……」

言い続けた言葉は自分のためのもの。

遼。お前がいなくなつて……。俺は何か失くした気分なんだ。

帰つて来ないのも知ってる。

入れ替わることがないのも知ってる。

もう、返事もしてくれないのもわかつてる。

．．．．でも、こつやって心の中で、お前に話しかけちゃうんだよ。

返事が無くて辛いだけなのに、それでも、語りかけちゃうんだよ．．．

俺は．．．心が折れそうだよ。

でもさ、母さんと、父さんが、俺を見てくれるんだ。

紘も、お前が記憶をいじくった所^{せい}為^{せい}だけど、俺を恋人として扱ってくれるんだ。

幸せなんだ。

だから．．．．だから、ホントに辛いけど．．．．．頑張ってみようかな。

でも、もし……どうしても辛くて辛くて、耐えられなくなった
ら……お前のトコに行ってもいいよな？

遼。

お前は、幸せだったか……？

33話

あれから――遼が逝ってから、もう二年が経^たつ。

時の流れは速いものだ。

俺と紘は20歳^{ハタチ}になった。

遼が記憶を封じてから、紘が思い出す様子はなかった。

だが、逆にそれゆえか、不安が消えることもなかった。それどころか、年々俺の、不安というか何と云うか・・・は心を占めるようになっていった。

それは、着実に俺の心を蝕^{くさ}んでいて・・・正直、少しツラかった。

でも、俺は生きなきゃいけない。

どんなに辛くても、ホントに、本当に堪^たえられなければならない限り、
紘を守らなきゃならない。

それが、遼と交わした約束だったから。

ところで。

俺と紘は、大学でも結構有名なカップルだった。

というのも、紘は、美人で運動もそこの女子なんかよりできるし、
俺も、自慢じゃないが容姿も整ってて何でもこなせる。おまけに、
成績もクラスでは、俺と紘で1位2位を争う。

そんな俺達が恋人同士なのだから、目立つな、と言う方が無茶な気
もする。

皆俺達の間係を知っているから、ちょっかいを出してくる奴もいな
い。

有名とか目立ってるとか、面倒としか思ってなかったが、意外と悪
くないもんだと最近思うようになっていた。

更に更に、俺達みたいな関係を目指すカップルさえ出てきてたらし
い。

何と云うか、行き過ぎの気もするが、まあ無理だろうから温かい目で見てた。

だって、無理だろ。

俺と紘だからこそ、この関係なんだから。

それこそ、生まれてからずっとのつきあいなんだ。・・・大半は
遼と紘との関係だけど。

誰にも真似^{まね}はできないさ。

だから、俺達の関係は死ぬまで変わらない！

・・・・・・と思っていたのに。

なんで、こうなってしまったんだろう。

一番の原因は、紘が酒に弱かったことだろうか。

紘が20歳になった祝いに、バーに連れて行って飲ませたのが悪かった。

紘の記憶の扉が、酔ったことであっけなく開いてしまった。

「……りょーう」

呼ばれた瞬間、心臓が跳ねた。

「りょー……帰る」

何と答えたらいいのか、わからなかった。

馴染みのバーテンが、驚いた顔で俺を見る。

困ったように苦笑いしてみせると、彼も困ったように笑った。

多分彼は、紘が、俺と誰かと二股かけてるんだと勘違いしているだろう。

大きな誤解だが、俺にはその誤解を解く余裕はなかった。

慌てて会計を済ませると、俺は紘を抱いてバーを出た。

「紘？大丈夫か？」

「なあに・・・？大丈夫？・・・大丈夫なわけ、ない、じゃない！」

突然声を荒げた紘に、思わずビクツとしてしまう。

「今まで、どこに行ってたのよ・・・探したんだよ？なのに・・・なのに、どこにもいなかったじゃない！」

「紘・・・？何を言ってるんだ？」

とりあえず、すつとぼけてみた。

「何言ってるう？遼、とぼける気い？」

まずい。完全に、俺を遼として認識している。

「遼って、誰だよ？お前、ホントに大丈夫か？」

「遼お？ごまかそうったって・・・そうはいかないい・・・んだからね！」

「俺は、泰紘だぞ？遼って、誰だよ？」

「泰紘・・・？なあに、それ？・・・りょう、騙すのは、や・・・
・よ」

言っただけ言っと、紘はコテツと寝てしまった。

腕にかかる重さが、急に重くなる。

泰紘オレの存在を否定した紘の言葉――――めまいが、した。

でも、どうしようか。

起きたら、忘れているだろうか？
覚えてたらどうしよう……

何と言ってごまかす？

もう一回洗脳し直す？

それとも……本当のコト、言っちゃまつ？

まいっとな………

頭の中でグチャグチャ考えている間に、家に着いた。

このまま紘を家に帰してしまうのもどうかと思い、自宅、俺の部屋に連れ込む。

紘のお袋さんに電話したら、既に遅い時間だったのもあって心配していた。

酔いが醒めたら家に帰すと言つと、やたらとお礼を言われた。

お礼を言われるような筋合いは無いだろうに……

逆に、初めてなのに飲ませすぎた俺を罵^{ののし}ってくれたっていいくらいだったのに。

俺は、なんとなく罪悪感を覚えた。

1時間経つて、ようやく紘が目を覚ました。

「……………うん……………」

「紘？」

「ああ……………おはよ……………」

「おはよう、じゃないだろ。お前、飲みすぎ。」

「だってえ……」

「だってもへつたくれもねえよ！まったく……帰れるか？」

「……帰りたくない。」

「じゃあ、自分で電話しろ。俺、覚めたら帰すって言っちったんだよ。」

「ん。わかった……」

そう言うと、紘は電話をかけ始めた。

俺のことを遼と呼ばないあたり、覚えてないのか……？

いや、でもあんなにはつきりと呼んでいたのに。

もちろん、忘れてるに越したことはないのだが……

悶々としている内に、紘は電話を終えていたらしい。

「ねえ、終わったよ？いいって。」

「あ、そう・・・って、いいのかよ!？」

「うん。いいって。」

「お袋さん、何考えてんだ？幼馴染とはいえ、俺、男なんだけど・・・？」

「大丈夫でしょ、だって。」

「・・・・・・はあ・・・わかったよ。」

「・・・・・・ねえ、ところでさ。」

「何だよ？俺、もう寝たいんだけど。」

「・・・・・・遼は、いつ逝ったの？」

「・・・・・・」

「泰紘。」

ウソだろ・・・・・・

覚えてたよ……遼！どうにかしてくれ！

「……何、言っただ？」

「とぼけないで！遼は、いつ死んだのか、って聞いてんの！」

「何で……覚えてんだ……」

「知らないわよ！お酒飲んだら、夢の中に遼が出てきたの。それで思い出したのよ！」

おいおい……勝手に夢の中に出てくんなよ、遼。

未練たらたらじゃねえか。

はあ……まったく、どうしてくれんだ……

「はあ……お前は、何が知りたいんだよ。」

「全部。」

「全部って？」

潮時だな・・・

「私喋^{しやべ}ったんだから、泰紘も話してよね。」

「ああ・・・」

それから俺は根掘り葉掘り聞かれて、全部話すハメになった。

朝までかかった話を聞き終わった紘の頬は、涙で濡^ぬれていた。

静かに泣いていた紘は、それはそれは美しかった。

33話（後書き）

なんか、話の繋がりがいまいちわからない文章になってしまいました。
た。

思いつくままに書いている文章なので色々ところ不満もあるかと思いますが、何卒ご勘弁下さい！><

感想、お待ちしております！

34話

ねえ、何でも何にも言わずに逝^いってしまったの？

私を傷つけないようにするため？

もし私の記憶が戻ったら、どうするつもりだった？

私の記憶が戻ることは考えなかった？

ねえ遼、私がどれだけ傷ついたと思う？

今、私の気持ちが多分だけグチャグチャかわかる？

苦しくて苦しくて。

何も考えられないよ。

泰紘の事が、受け入れられないよ……………

最初の頃に戻っちゃった。

ねえ、どうすればいい？

あなたが恋しくて、おかしくなっちゃってしまいそう。

なんで最期、一緒にいさせてくれなかったの？

最期・・・最期だけでも、あなたといっしょにいたかった。

笑っては無理だけど、泣いちゃったと思うけど、きっと文句も沢山言っただろうけど、お別れを言いたかった。

ちゃんと、私が送り出してあげたかった。

正気でいらなかったかもしれないけど、それでも見送ってあげたかったよ。

なのに。チャンスもくれないなんて。

ぜーっくんぶ忘れさせちゃえば、私も自分も少しは楽になれると思った？

そんなことなかったでしょう。

きつと、私の記憶を消すとき、辛かったよね。

独^{ひと}りで逝くとき、寂しかったでしょう。怖^{おそ}かったでしょう。

ごめんね、一緒にいてあげられなくて。

でもやっぱり、勝手に一人で逝^いつたのは、許せないよ。

一生、許せない。

話を聞いて呆然としていた私を氣遣^{きづか}ってくれた泰紘の手を振り解^{ほど}いて、泰紘のお母さんの声も無視して、私は逃げるようにして泰紘の家を出た。

家に帰ると、お母さんに何も言わずに部屋に引きこもる。

「紘……?どうしたの?」

朝御飯、いらないの?昨日のトンかつ、とっておいてあるけど?」

心配そうに階下から呼びかける声にも、答えられない。

答えるだけの気力が残っていない。

「紘？返事くらいしなさいよ。．．．入るわよ？」

返事をする間もなく、お母さんは部屋に侵入してきた。

「．．．どうしたの？何かあった？」

「．．．．．．．．．．．」

「お母さんには、言えない？」

「．．．．．．．．．．．」

「返事くらいして、って言ってるでしょ？」

「．．．わかん、ない．．．．．」

「何が？」

「．．．全部．．．どう、すれば．．．．．いいのか．．．」

「ねえ、紘。話したくなかったら話さなくてもいいよ？」

でも、話したら少し楽になることもあるんじゃないかな。どう・・・？」

「・・・・・・・・ちょっと、待って・・・・・・・・」

「わかった。じゃあ、お母さん下に降りてるから。いつでもおいで。」

「・・・・・・・・とんかつ、温めといて・・・・・・・・」

「はいはい。」

お母さんの言う通り、話せば少しは楽になるだろうか。

私一人でグダグダ考えていても、何にも解決しないことは確かだし・・・

少し冷静になって考えていたら、段々お腹が空^すいてきた。

そろそろ下に行こうか。

30分くらい経って下に降りていくと、お母さんがとんかつを温め

直してくれた。

随分とお腹もへっていて、お母さんの視線を感じながら黙々と遅い朝御飯を食べた。

「……で、何か話すことはある？」

「……長いよ。」

「いいよ。大丈夫。お母さん、時間だけはあるから。」

「……ん……遼はね、事件後も意識あつたんだ。えっと……つまり、二重人格みたいになつて……でも、二年前に、意識も消えちゃったんだって。遼、死んじゃった……もう、戻ってこないの……」

最初に大まかな内容を言つてしまい、後は遼への文句ばかりグダグダと続けた。

お母さんは何も言わず、ただ静かに私の話を聞いてくれた。

全部話しきつてしまうと、さっき涸^かれてしまったかと思つた涙が、また溢れてきた。

溢れて溢れて、お母さんが見ているのに声まで出てきてしまった。

「ふっ……何で……遼、がつ……つく……」

「……でも遼君は、愛してるって、言ってくれたんでしょ？ 忘れないで、って言ったんでしょ？ 思い出させてくれたのに、彼を恨むの……？」

初めて口をはさんだ母の声に、思いがけずビクツとした。
痛々しい声だった。

「お母さん、遼君がどれだけ辛かったか、あんたよりはわかってると思うわよ。」

返事が出来なかった。

「誰だって、好きな子に忘れて欲しいわけじゃない。自分の代わりに同じ姿形をした別人があんたの恋人になっちゃうなんて、辛くて堪^{たま}らないに決まってるじゃない。」

それでも、紘は自分の事しか考えられない？

それは、私をはっきりと咎^{とが}めるものだった。

わかっている。

どれだけ遠が辛かったことが、想像つかないほどバカじゃない。

けれど。

それでも遠を恨んでしまいたいくらい、私も苦しい。

他人に責任を転嫁^{てんか}してしまえば、恨みの中に悲しみを閉じ込めてしまえる。

相手を責めている間は、哀しさを忘れていられる。

だから、一番辛かったのは遠だと分かっているても目を背^{そむ}けていたかった。

でも、お母さんはそれを許してくれない。

あくまで、現実を、真実を見据えろ、と。

私にそれができるだろうか。
耐えられるだろうか。

あぁ、遼・・・・・・・・「心が壊れそう」ってこいつ事を言っのね。
・・・・・・・・

35話

ベッドに横になりながら、悶々とする。

わかってる。

遼を責めるべきじゃないこと。

わかってる。

泰紘には何の責任もないこと。

自分の中で、どうにかして昇華しなくちゃいけないことも、時間が癒してくれるはずだということも、わかってる。

頭では、理解している。

でも。

苦しい。

こんなに苦しいなら、本当に忘れたままの方が良かったかもしれない。

いや、忘れたくはない・・・けれど。それでも、辛い。

もう、遼はいない。

しかも二年前に既に消えてしまっている。

二年——決して短くない年月。

ずっと遼を忘れていたかと思うと、そんな自分が憎くなる。教えてくれなかった泰紘が、憎くなる。

でも、憎めない。

自分のことは嫌になってもキリがないけれど、泰紘を恨んじやいけない。

わかっている——わかっているのに——っ！

私はいつからこんなに弱くなったんだろう。

いつから？

昔はこんなじゃなかった。

・・・昔っていつ？

本当に弱くなかったんだっけ？

自分で自分がわからなくなる。

自分に否定されてしまいそうな、脆弱ぜいじやくな自我。

私は一体………

人が死んだだけで、こんなにも辛くなるものなのか。

近しい人が亡くなると、こんなにも苦しくなるのか。

愛しい人が逝ってしまうと、こんなにも弱くなるのか。

どうして良いかわからない。

考えられない。

頭が働かない。

思考が、停止する。

感情が……凍りつく。

嫌だ・・・・・・・・

こんなの、イヤ。

こんなのは、私じゃない。

私はもっと、強いはず。

私は、どんなことがあっても耐えられる、強い人間のはず。

何でも乗り越えられる力が、あるはず――

何でこうなってしまったの。

私を弱くするものは何。

弱くちゃ生きていけない。

私を弱くするものは・・・・・・・・排除しなきゃ。

私は強い。

私は、”できる”子。

弱みは、作らない。

弱点なんて、私にはいらない。

私の心の安寧^{あんねい}を脅^{おびや}かすものは、なくさない。

消してしまわないと――

フッと、目が覚める。

私は、一体今まで、何をしていたんだろう。

ベッドに転がりながら、私は今の自分の状態について考えた。

何でベッドに入っているのか、さっぱりわからない。

まだ寝る時間には早いし、別に気分が悪いわけでもない。

まず、寝る前に何をしていたんだっけ………？

………そうだ………今日も、遼を待っていないと。

支度して、待っていないと。

うーん、待ってるだけなんてつまんない。

遼の部屋に、押しかけちゃおう。

いいよね、毎日しようって、約束したもん。

うん。忘れてないよ、遼。

忘れてないよ。

大丈夫。

「忘れないで」という言葉だけが、私の頭を占めていた。

唯一その言葉だけが、私にとって確かなものだった。

23時。もうそろそろ寝ようと思った矢先に。

コンコンッ、

部屋の窓が音を立てた。

びっくりした。

まさか来るとは思わなかった。

今日は紘にとっては辛い日だったはずだ。

もしかしたら、俺のことを嫌いになったかもしれない。

仕方ないと思った。

ずっと騙^{だま}していたから。

ずっと黙って、隠していたから。

嫌われただろうと、思った。

愛想も尽かされるだろうと思った。

もう会ってもくれないかもしれないとも、覚悟した。

・・・だから、紘が来たと分かったときは、純粹に嬉しかった。

なのに。

俺は、とんでもない事をしてしまっていたのだ。

あの時とんでもないことをしたんだと、後悔した。

「遼！来たよ！」

「・・・え・・・」

俺のことを見て、素面しめんの紘は「遼」と呼んだ。

固まった俺を見て、紘は不思議そうに覗きこんでくる。

「どうしたの？約束、忘れたの？」

「！？・・・約束・・・・・・・・？」

「もう！受験受かったら、毎日しょって約束したじゃない。忘れちゃったの！？」

「・・・つい昨日の約束なのにつ！」

「・・・・・・・・！！！」

紘の時間は、2年前まで巻き戻っていた。

しかも、俺の存在は綺麗さっぱり消えていて。

どうしたらいいか、わからなかった。

紘。

お前は

目の前が、白く霞^{かす}んでいつて……何も見えなくなった。

絏、ひろ……

36話（前書き）

皆さん、お久しぶりです。

今回は泰紘、紘、雅美（紘母）の三人の視点です。

お母さんの視点で書くのは初めてなんで・・・随分時間がかかりました><

駄文ですが、楽しんでいただけたら幸いです！

36話

眩^{まぶ}しい・・・

「・・・母さん・・・」

「泰紘・・・目、覚めたのね。」

安心したような母の瞳の奥にチラツと見えた憂いの影に、俺は自分のした事を思い出した。

「母さん・・・どうしよう・・・俺、取り返しのつかない事を・・・！」

「・・・」

「わかってるんだ・・・？」

「・・・紘ちゃん、記憶がおかしく・・・なってる、のね？」

「ん・・・母さんっ・・・どうしよう・・・俺のせいだ・・・」

」

「誰のせいでもないわ。」

「俺の所為だ．．．．あ、紘は．．．？」

「大丈夫って言って、帰ってもらったわ。」

「．．．．ねえ、あなたのせいじゃないわ。自分を責めるのはやめなさい。」

「だって．．．俺が話しちまったから．．俺が、酒飲ませすぎたから．．．．！」

「どうしようもなかったのよ。」

「紘ちゃんだって、今回お酒を飲まなくて思い出さなかったとしても、いつか飲んで、それで思い出したかもしれないでしょう？．．．．時間の問題だったのよ。」

「でも．．．．洗脳し直せば．．．」

「それは、紘ちゃんも遼も．．望んでいないんじゃないかしら。」

「望むとか望まないとか．．．．そんなこと．．そのせいで、紘はおかしくなっちゃったんだぞ．．俺の所為だよ．．．」

「泰紘が悪いんじゃないわ．．．．言ってしまうえば、そうね、遼が悪いのよ。あの子がそんな勝手なことしなければ．．．」

「遼の所為じゃない。あの時は、そうしないと．．あの時こそ紘がおかしくなりそうだったんだよ。」

「そうは言ってもね、」

「俺が、紘の記憶を留めておけば・・・こんなことにはならなかったのに・・・！俺は、最低だ・・・」

「泰紘！そんな風に自分を貶めるのはやめなさい！」

「でも、俺が・・・」

「もう起こってしまったことは仕方がないじゃない。考えなきゃいけないのは、これからどうするか、よ。」

「・・・どうするってたって・・・どうしょーもねえじゃん。」

「考えんのよ。何か方法がある筈よ。」

「・・・」

母さんは、優しい。

いつも、俺のために動いてくれる。

俺が泰紘でも。遼じゃなくても。

「・・・で、ちょっとあんたに聞く事があるんだけど。」

さつきまでと随分変わった母の声音の中に、静かな怒りを感じた。

「え……………」

「何で、夜なのに紘ちゃんがこの家にいたのかしら？帰ったはずの紘ちゃんが。」

「あ……………それは……………」

優しいだけじゃ終わらなかった。

しまった、と思ったが、後の祭りだった……………

母さんは執念深い。

根掘り葉掘り、聞かれるんだろうな。。
そう思うと、気が重くなった。

遼は、大丈夫だろうか。

急に倒れてしまったけれど・・・

遼のお母さんが大丈夫って言うから帰ってきちゃったけど、本当に大丈夫なんだろうか・・・？

それに・・・遼が倒れた、って言いに行った時の遼のお母さんの表情。

何か変な事を言ったかなあ？

すっごく、うーん・・・何て言うんだろう？不思議な？心配そうなの顔してた・・・

お母さんにも、言わないと。

あ、でも・・・言ったら夜会ってたこと、バレちゃうな。怒られるだろうな・・・あゝあ・・・

「ね、お母さん・・・」

「どうしたの、紘？もう寝る時間でしょう。」

「ん・・・あのね、さっき、遼が倒れた。」

「・・・ええ？」

「さっきね、遼が急に、倒れちゃったの……遼のお母さんは大丈夫って言うてくれたんだけど、大丈夫かな、遼……」

「え？ちょ……ちょっと待って。」

「うん」

何か変だな……お母さん、遼のお母さんと同じ表情かおしてる。
……？……？……本当に、何か変な事言っただけ？

「ね、紘……何で、遼君、なの？」

「は？」

思わず呆ほうけた声が出る。
何で、って？何が？

「え？どういう事？」

お母さんの表情が、一瞬搔かき消えた。
が、すぐに戻る。

変なの……

「……いいえ……何でもないわ。母さんの考え違い……」

「・・・で、あんたは何で今、遼君が倒れた事を知ってるの？」

「・・・・・・・・怒らないでくれる・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・いいから、言いなさい。」

「遼の部屋にいたから・・・」

「何のために。こんな時間に・・・」

「セックス、しようと・・・」

「ええっ!？」

「・・・・・・・・ごめんなさい・・・」

「紘・・・お前、今日が初めてじゃないね・・・？」

「ごめんなさい・・・」

「・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・もういいわ。紘は、今日はもう寝なさい・・・」

「はい・・・・・・・・ごめんなさい・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・」

沈黙が痛い。

こんなことなら、今日行かなきゃ良かった。
でも、会いたかったんだもん。

遼と、約束したんだもん……………

約束、したんだもん……………

どうしよう。

遼君が倒れたって言うのはもちろん大変な事だけれど……………

待って、待って……………

紘と、遼君が……………「そういう関係」だったなんて。

いつの間に？

つい最近？ハタチになってから？なったから？

それとも・・・・・・・・

ああ、ダメ・・・考えれば考えるほど混乱しちゃう。

まさか、瑞貴、知ってたなんて事はないわよね・・・？
知ってて、黙ってたなんてことは・・・

ああ、考えたくない。

あれほど言い聞かせてきたのに。

その度にきちんと頷うなづいて・・・わかっていたと思っていたのに。

相思相愛なのは知ってたわ。

でも・・・セックスは話が違うわよ・・・

・・・でも、もう二人とも成人した・・・大人になった・・・
だから、二人できちんと考えて、その上でのコトだったのかしら。

そうだったら心配することはないけれど・・・

でも、初めてじゃないよねって聞いたときの顔・・・あれは、間違

いなく前から・・・・・・・・

ああ、参ったわ・・・・・・・・

まさか、こんなに色々な事が急に起こるなんて。

遼君と、絃が・・・・・・・・

というか、何で「遼君」なの？

何で「泰絃君」じゃないの？

絃に、何かあったんじゃないかしら・・・・・・・・

そうよ、絃、泰絃君と遼君の嘘を知ってすごく動揺してた。
あの子、強がりだけど、昔から本当は弱い子だった・・・

もしかして、絃、今ちよつとおかしくなっちゃってる！？

まさか。

でも、でも・・・本当にそうだとして、何ができるかしら？

私、何もできないわ・・・・・・・・ああ。何て無力な母親。

子供一人守りきれない・・・・・・・・無力だわ・・・

・ ごめんね、お母さん、あなたがわからなくなってきた・・・
・

36話（後書き）

なんかドロドロした感じになってきました。。。
どうなるのか、私自身もよくわかりません><

心の向くままに書いているのでorz

次の更新も遅くなると思いますが、待っていただけたら嬉しいです。

37話

「遼のところに、行ってくるね。」

「あ．．．いつてらっしゃい．．．．．」

そうだよね。

いつてらっしゃい、としか言えないよね、普通。

お母さん、私のことどう思ってるだろう？

何か．．．バレてから罪悪感がうず疼く。

結婚前にそういうコトはしちゃいけないって言われて、毎回額いてたのに．．．嘘ついてたってばれたよね。
ましてやまだ18なのに。

お母さん、失望したかな．．．？

私、お母さんを失望させちゃったかな？

でも、私には遼だけなんだもの。

他には誰もいない。

遼と関係が続けられないなら、他の誰とも関係を持たなくていい。ううん、持ちたくない。

だからね、お母さん。

私も、覚悟があるんだよ。

私は、遼以外とはセックスしない。

決めてるの。

遼がどうかなんて関係ない。

きつとないと思うけど、あつてほしくないけど、もし遼に、私以上に好きな人ができて私から離れていってしまったら、私には遼だけ。

遼以外を想うことは、私にはないの。

だから、許して。

遼の家のインターフォンを押すと、お母さんが出た。

「こんにちは。紘です。遼、いますか？」

「……………あ、ええ。いるわよ……………ちょっと待っててね。」

応答に少しの間^まがあつたのを疑問に思いつつ、遼のお母さんが開けてくれたドアから入る。

「・・・やす・・・遼は二階よ。ちよつとまだ具合良くないみたいだけど・・・紘ちゃんなら大丈夫でしょう。」

「ありがとうございます。」

”やす”・・・？
何が言いたかつたんだろう？

さっきの間^まといい口^{くち}ごもつた言葉といい、どうも気にかかつたが、遼の様子の方が心配ですぐに頭から抜けてしまった。

「遼・・・入るよ？」

声だけかけて部屋に入ると、遼はすごく驚いた顔をした。

「え・・・紘？」

「具合、まだよくないんだって？」

「え・・・ああ、まあ・・・大したことないよ。」

「ホントに大丈夫？」

「平気だよ・・・心配すんなって。」

「うん・・・」

・・・沈黙が痛い。

今までこんな事なかったのに。

黙ってても、遼の隣にいただけでフワツとした、温かい気持ちになったのに。

どうしてだろう・・・

遼も気まずいと思ってるんだろうか。
さつきから、私の方を見てくれない・・・

何かあったわけ・・・？

あ・・・そうだ。

遼に、あのこと話さなくちゃ。

「ねえ、遼。」

話しかけた途端、彼の体はこっちが驚くほどビクツと震えた。

「え．．．どうかした？ 遼．．？」

「あ、な、何でもないよ．．．」

「本当？」

「あ、ああ．．．それより、さっき何言おうとしたんだよ。」

「ああ、あのね、お母さんに、その．．．私達の事ばれちゃった。ごめん。」

「ああ．．．それは、俺もばれたから、それであいこつてこと．．．」

「遼もばれたの？．．．っていうか、そりゃばれるよね。夜中に私がいるんだもん．．．ホントごめん」

「いいよ．．．紘は、怒られたか？」

「ううん。何か、ビクリする方が大きかったみたいで．．．遼は？」

「俺は．．．まあ．．．」

「怒られたんだ。」

「ちつとな。」

「そうだよね・・・まだハタチにもなっていないのに、そんな事してたなんて怒っちゃうよね。」

「ハタチ二十歳・・・」

ハタチ、と呟く遼の瞳が、怯えたように揺れた。

どうしたんだろう。

何か変なこと言ったかな・・・

何か変だよ・・・遼のお母さんも変だったし・・・何かあった？

「ねえ、何かあったの？」

「え、ええ・・・！？」

焦った声を出した遼の様子に、凶星だと直感した。

「遼・・・何があったの？」

「え・・・・・・・・・・」

「正直に答えてよ。」

「なあ・・・紘・・・・・・・・年いくつだっけ。」

突然の問いに不意をつかれる。
大体、どういう質問よ、それ。

「年い??何で今更?」

「いいから。」

「18でしょうが。何言ってるの?ホントに。」

遼の顔が歪んだ。

何かを堪えてるような表情……どうしたの……?

「なあ……」

「何?どうしたのよ?」

「言いづらんだけど……お前、今記憶喪失になってんだよ。」

「はあ?」

何を言い出すかと思えば。
私が記憶喪失?

何をしたら私が記憶喪失になるんだろう。

「俺達、今・・・ハタチだよ。」

「ええっ？」

「絃も俺も、今20歳だよ・・・絃は2日前にハタチになったばっかだよ。」

「え、何言ってるの？」

「俺のこと、信じらんない？」

「いや、信じるとか信じないとか・・・何言ってるんだか・・・」

遼は、何を言ってるんだろう？
何が何だかわからない。

私が20歳？

いやいや・・・何言っちゃってるの。
私は18でしょ。

だって一昨日おとといが合格発表日で・・・

一昨日発表見て、その後そのまま遼の家に行ってセックスして・・・

あれ・・・？

何だろう？

何か変な感じがする・・・

遼の家に行ったのは確かなんだけど・・・

「遼」？

っていうか、昨日の夜まで何してたんだっけ・・・？

一昨日の夜帰ってきて・・・その後から記憶がない・・・！！？

あれ？

こんがらがってきた・・・

あれ・・・？

「絃・・・？」

俯いたままの私に恐る恐るかけられた遼の声に、意識が引き戻された。

「あ・・・」

「紘、大丈夫か？」

「・・・わかんない・・・わかんないよっ・・・！」

「お、おい・・・」

「帰るっ！！」

返事を待たずに部屋を出る。

遼のお母さんには一応挨拶しとかないと・・・

「お邪魔しました・・・！」

「あ・・・紘ちゃん・・・？」

何が何だかわからない・・・！！

早く帰ってお母さんに聞こう。

何を聞けばいいのかもわからなかったけれど、そのことだけしか考えられなかった。

37話（後書き）

そつえば・・・今回の話を書いていて思い出しましたが。

二年前の合格発表の日と「一昨日」の晩御飯が、とんかつで一緒だったんですね。

一応「一昨日」は紘の誕生日なので好物のとんかつにしましたが、変えた方がストーリー的にわかりやすかったですかね・・・（汗）

再度お知らせです。

皆様、こんにちは。

不定期ながら少しずつ更新を続けてまいりましたが、そろそろ勉強に本腰を入れる時期となり、少々時間が取れなくなってきました。

ひとまず、ここで活動休止とさせていただきます。

もしかしたら本当にたまに、更新ができるかもしれませんが、完結はおそらく受験が終わってからになると思います。

このような作品でも読んでいただいている方々には本当に申し訳ありませんが、4月頃までお待ちください。

ご理解をお願い致します。

それでは、来年まで。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7382p/>

半身 ~ Please don't leave me ~

2011年9月8日21時57分発行